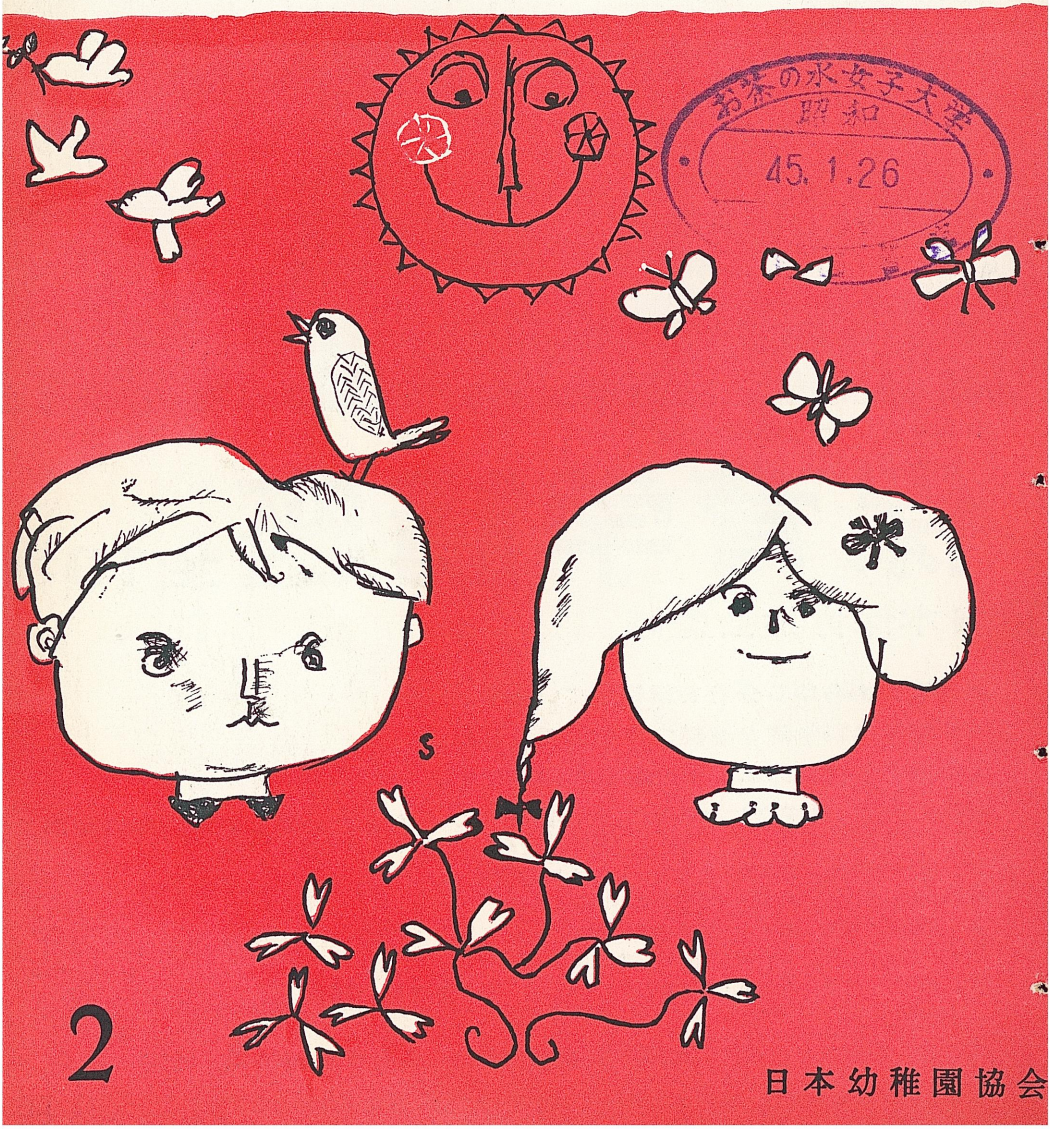
家庭　保育所・幼稚園

幼児の教育

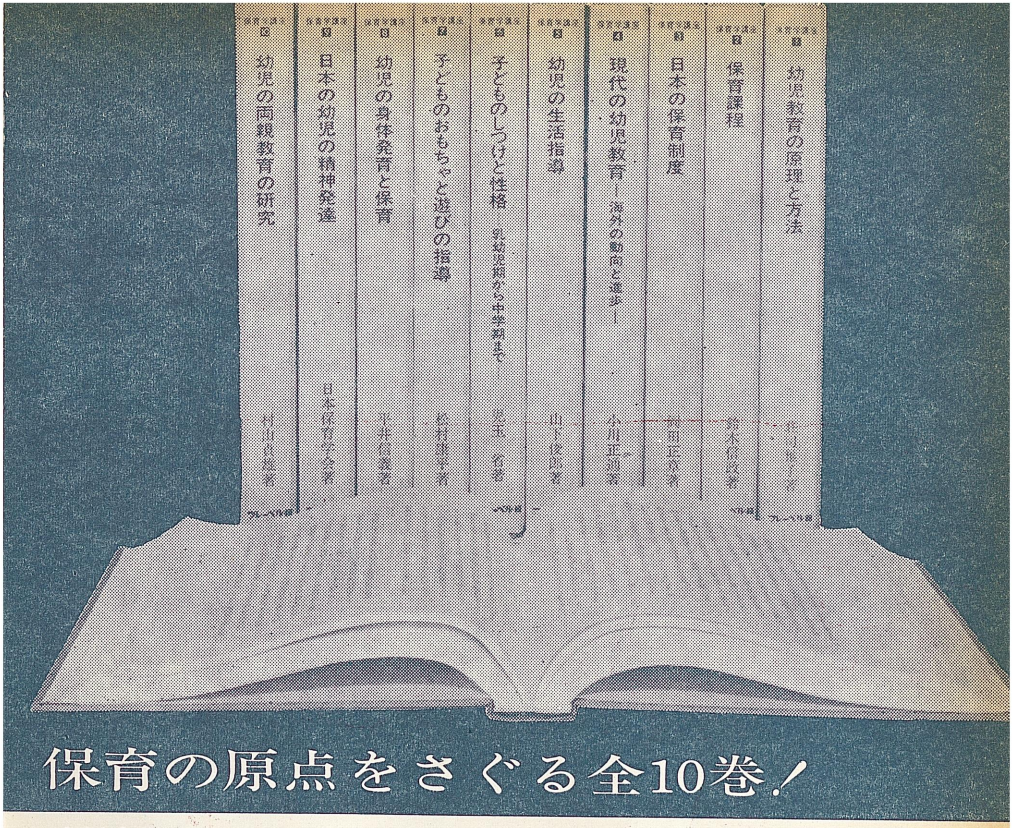
第六十九巻　第二号



お茶の水女子大学
昭和
45.1.26

2

日本幼稚園協会



保育の原点をさぐる全10巻！

日本保育学会発足20周年記念出版

保育学講座 全10巻

日本保育学会監修

- 保育のあらゆる分野を網羅しています。
- 保育学に科学的な基礎づけを加えました。
- 権威ある執筆陣による充実した内容です。
- 研究者に、保育者に、学生に、ぜひ読んでいただきたい新しい保育学の全集です

第1回配本／10月　第6巻・こどものしつけと性格
第2回配本／11月　第1巻・幼児教育の原理と方法
第3回配本／12月　第4巻・現代の幼児教育
第4回配本／1月　第3巻・日本の保育制度
第5回配本／2月　第2巻・保育課程　＊以下毎月1冊配本

A5判・上製本ケース付　**定価・各巻1,200円　全巻予約特価10,000円**

もよりの代理店・支社・支店・出張所にご用命ください　発行・株式会社 フレーベル館

幼児の教育　目次

——第六十九巻　二月号——

表紙　鈴木義治

教育のリズム……周郷　博…(2)

幼児の一日の活動について(三)……神沢良輔
上平多美・石坂昭子・坂倉哉子
原田花子・上之郷瑞代・森川祥子…(27)

及川平治の幼稚園保育(二)……久保いと…(37)

幼年期について……勝部真長…(45)

幼児の言語研究(三)—幼稚園児の話しコトバにおける動詞の実態—
西ノ内多恵・伊東照子・村田和子…(58)

フレーベルの遺跡を訪ねて……内山憲尚…(65)

教育のリズム

周郷　博

今日、私は教育のリズムという題で話そうと思っていました。けれども、その問題は、考えているとだんだんむずかしくなってきまして、自信がなくなってしまいました。ぼくが、幼稚園の園長になって、三ヶ月たちましたが、ここの幼稚園をどういうふうにしたらよいのか、今でもまだ、見当がつかないのです。

ぼくが、最初に考えたことは、国立大学の幼稚園は、まず第一に、清潔でなければいけないという気持ち。影があって、因習によって、悪をおかす、直接でなくても、間接に、悪をおかしたのではいけないという気持ち。それから、ここの幼稚園が名前が知られている幼稚園である、長い歴史をもっている幼稚園である、ということに寄っかかって、いい気になっていたのではいけない。この幼稚園で何をやっているかということは、日本の幼児たちの全体の問題に対して、歴史が古くて、名前が知られていれば知られているほど、ここの幼稚園は日本の社会に対して責任をとらなければならないのだという、この二つの問題を中心にして悩み続けてきているわけです。

これも漠然とした考えですが、ぼくは、一体、園長とは何なのか、と考えた。ぼくの友人は、「周郷さん、この頃、動物園長になったそうじゃないか」ある意味では、人間は動物ですから。少なくとも、下半身は動物ですよ。体というのは、だいたい動物と同じ性質で、できている。

ただ、アポロ十一号で、行った人などを考えてみると、あすこまでいくと、動物的なものなんかでは、行かれない。で、アポロ十一号の月着陸なんかは、ぼくは、そんなにえらいことではないと思っている。もっと重要なのは、人間の体は、動物と同じ性質をもってできているけれども、人間の心というのか、中枢というのか、もっとも今のところはだらけていて低下していますけれど

も、アポロ十一号みたいに、あんなところにいって、いい気になるのではなくて、もっと人間の中枢にある、心というものは、神に近づくことができるはずなんだ。そういう問題で、ぼくはテアード・シャルダンに、非常に心酔しているわけなんです。

今度八月五日に、ヨーロッパへ行くのは、テアード・シャルダンが生まれた、オーベルニュの城に行くことが、ぼくの主な目的なのです。そういう問題をわれわれはもっているのです。けれども一方では、人間は動物である、というのは確かなことです。人間だ、人間だ、という気持ちは、特におとなというのは、生きることに慣れっこになってしまって、私は人間だ、と思っていますけれども、人間は、一面では動物ですよ。動物的なものを、人間的なものがささえているもので、動物的なものを土台にした人間的なものが、そろっていないわけだ。で、ぼくは、動物園長であるように、自分を考えることはいいことだと思うのです。それは決して子どもを軽蔑しているのではなくて、素直に子どもをみていることだ、と信じています。私も、また、動物なのです。しかし、動物であるけれども、恵みがあれば、私は、この動物の中で、神に近いものになり得るという願いをもって生きています。人間は、動物だけれども、ベルグソンが考えたようにね。

人間は、植物ととってもよく似ています。木ととっても似ています。これはインドの大昔から、宇宙は一本の木であると、ウパニシャッドは考えました。人類というのも、今、人類は、アポロ十一号みたいに、月のところまで行ったりすると、地球というものは、一つであるとますますみるようになりました。そして人類は一つなんであって、そこまでくると、長い地球の歴史を通じて、人類というのは一本の木なんだと。その一本の木にいろいろな枝が生えてきましたけれども、その一本の木の先端にでた枝が、人間なんだと考える方が、自分の意見がはっきりすると思います。私は、人間は植物と考えることが、特に、一本の木だと考えることが好きなのですけれども。子どもの時から自分を、一本の木のように感じてきました。フレーベルが幼稚園ということを考えたのも、そういう気持ちがあってのことと思います。一人一人の人間が木であるように感じると、常日頃のうらみなどのようなものをなくして感じることができるね。何か油っこく、しつっこく人間の問題を考えるのではなくて、植物的にサラッとした状態で育って、伸びてゆくものに対する感覚というものが、戻ってくるような気がします。

ところが、休みの間、土地の問題などがあってから、私がもう一つ考えたのは、ぼくは、動物園長や植物園長ではなくて、そういう性もあるけれども、ぼくは船長なのだと思いました。船長というのは、船の中にもぐり込んでいたのではだめなんで、回りは波だっているけれども、広い海の中で自分の位置をちゃんとみつけて、どこへこの船が行くかということを考えていなければ、船長として失格です。これは、園長になったとたんから、そう思っ

ていたのですけれども、私は、ここの園長として、ここの幼稚園にかいならされた人間にはならないはずだ。ここのことをやるのだけれども、しかし、広く外をみていないと、ここの幼稚園がどこへ行っていいかわからないので、そういう意味で、ぼくは、船長だ、というふうに思った。そういうふうに考えてきて、船長としても、動物園長としても、植物園長としても、私は、まだ何をやっていいのか、ほんとうのところわからない。

教育のリズムなどという題を出しておきましたけれども、この問題は、バートランド・ラッセルと友人で、それよりも早く死んでしまった、アーサー・ノース・ホワイトヘッドという人が、一九二二年にロンドンでやった講演の題なのです。この教育のリズムという題をかりて、今の日本の問題を考えようと思ったわけです。というのは、戦後の日本では、教育がどこもかしこも、何だか同じような状態になってしまって、教育に首尾一貫した生命の波というものが、消えてしまったような気がしますから。教育というのもまた、生き物ですから。

戦後の日本では、いかにもたくさん、学校や幼稚園ができたりしましたけれども、その時の、ホワイトヘッドの講演の中に出てくる言葉にもありますけれども、サハラ砂漠のように、教育というものが、無味乾燥なものになってしまった、というのが、ぼくらが、現実にもっている問題です。こういう問題を、進化論とか、レヴィ＝ストロースのような構造主義というようなものと関係をつけて、よく考えてみたいと思ったわけです。けれども、何だか、途中でわからなくなってしまいました。つまり、教育という問題は、非常に複雑ですからわからないのです。

教育という問題は、アポロ十一号が月へ行くよりもっとむずかしい問題ですよ。教育という問題は、人間が、外について考える問題ではないのですから。人間が外について、つまり、自然や何かを理解すると同時に、人間が、人間自身の成長する姿を理解しなくてはいけないのですからね。たいへんむずかしく、複雑な問題なのだ。岡先生がいっているように、教育という問題を、戦後、いかにも簡単なように考えていることが、日本の不幸なのですから。教育というのは、きわめて複雑な問題であって、人間自身について考える問題です。そして、人間がどこへ行くかという、人間が、どういう運命を背負っていて、その運命は、どういう形で、より高い次元のものとして価値をもちうるかという、そういう問題ですから。教育の問題は、現代の世界の状態でいえば、世界の人類にとって、将来、人間がこれで滅びてしまうのか、人間は、次のいい時代に入ることができるか、という分かれ目のかぎを握っているものが教育なので、考えれば考えるほど、それはむずかしいものです。

最初にホワイトヘッドが、どういうことを考えたか、というの

を言います。アーサー・ノース・ホワイトヘッドは、数学者です。数学者というのは、構造主義者と同じように、自分の都合とか、自分の私欲とかでは物を考えることのできない種類の人間です。

簡単に言うと、教育というのは、三つの段階でできている。第一は、romance ローマンスの段階。romance というのは、簡単にいうと、物語の段階であります。それは、こまかく、個々のことについて調べる、ということではない。全体ということが、わかっている状態、全体を想像している状態です。二番目にくるのは、stage of precision で、個々のこまかい問題を確かめていくという段階。三番目に今度は、全体を総合して、自分の考えが生まれてくる。そういう三つの段階を総合して、自分の考えが生まれてくると、ホワイトヘッドは、考えたわけです。

だから、普通で考えると、小学校の二年か三年ぐらいから、これは、stage of precision というものになるわけです。個々の知識を確かに自分のものとして、訓練して身につける。それから、十五歳になって、しかし、あるものは、ホワイトヘッドは、科学というのは、十二歳ぐらいから、stage of romance という状態に入るんだ、という。そして、個々の問題を確かめて、大学の段階にきたら、それが総合されて、その人だけの独特の考え方ができるようにするのが、stage of generalization だ。stage of generalization つまり、総合の段階というのは、十五歳以後にはじまってきますけれども、これは青年期以後に、すべての人が負っている考えです。すべての人が自分の考えを、人生観も、学問についても、自分の考えを今までのことを総合して、ここではっきりとつかまなくてはならぬという段階がくるわけです。

で、stage of romance というのは、幼児期の段階であり、幼児期から小学校低学年ぐらいまでの問題なのである。簡単に幼児期といってしまってもいいけれども、ある問題については、stage of romance、つまり、物語のように、真理がはっきりみえてこないけれども、全体が、半ばみえてきた、という真理についての驚きを感じる時期があるわけだね。だから、幼児期と簡単にいってしまっていいかどうかはわからない。

ところで、ホワイトヘッドの教育のリズムという三つの段階が、今の日本でどうなっているかと考えてみると。——stage of precision、つまり、個々の断片的な知識というものは、小学校の半ば頃から中学のはじめ頃にかけて訓練してやっていかなくてはいけない。つまり、知識ですからね。これは、やっていかなければいけないのですが、戦後の日本の教育は、社会が非常に速く変わる、社会の変わり方が、急速でありすぎたので、人間の心には、一種の真空ができた状態です。日本の教育は、何か新しいことを詰め込むというしかたです。民主主義なんかというもの、これは、単に、知識です。stage of romance という、民主主義というものは、一体何なのか。形ははっきりしないけれども、一つ

の発酵状態として、人間が、いかに生きるかということを、漠然と感じるという段階なしに、単に、precision、単に、断片的な知識として、民主主義というものが入ってきましたね。日本の教育は、試験勉強というものも、ここに入りますけれども、何か断片的な知識で、しかも、そこで結論になってしまったような知識、それが、日本の教育を全部、荒してしまったのではないか、という気がする。

stage of romance というところでは、つまり、幼児の時期は、stage of precision であってはいけないわけですね。ふんわりした、人間の、生きていく姿というものがわかってくると、自然の美しさというものが、文学的にわかってくると、文学的に、あるいは詩的にでもいいのですけれども、この世の姿が美しいものとして、個々に分解してみるのではなくて、全体の姿がわかってくる喜びと驚きが、ここで、最初になければいけないのだ。そして、次の段階に、花なら花、虫なら虫、物質なら物質、個々の構造について、詳しく知るという段階がきて、そして、今度、青年期に入って、今までのこと全体を総合して、自分の考えがしっかりしたものになってくるという、三つの段階を経るのが、人間の成長の三つの周期なんだ、というのがホワイトヘッドの考え方です。

だから、現代の日本の社会と教育は、個々の、切れ切れの、何ら全体として意味をもたない知識を覚えるということが、教育全体となってしまって、従って、大学生になっても、自分自身の責任をもった世界観、ものの考え方、というものができないわけですよ。そして、この教育のリズムの混乱状態というのは、幼児たちの生活にも、押し込んできてしまっている。つまり、stage of precision というものを省いてしまって、家族というもの、これも変わっていかなくてはいけないのですけれども、しかし、家族が、どう変わっていくかということについて見当がつかないので、漫然と、変わらされている状態です。家庭は、科学や、技術の進歩によって、切り刻まれて、何か、家庭独特のロマンティックなふんい気が、なくなってきている状態ですよね。

子どもの絵もそうでしょう。最初の段階、小学校の二年ぐらいまでの時には、子どもは、ロマンスの段階として、全体をつかんでいる。非常に味わいのある絵になるはずですね。小学校の二年ぐらいから、五年ぐらいになると、これは、試験勉強だけのせいじゃないのだけれど、描かれる絵の、非常に複雑な部分について知ることになるわけです。従って、絵のおもしろ味が、そこでちょっと落ちるわけです。そして、generalization 総合の段階というところにきて、初めて、その子ども独特の非常に複雑なものを総合した、一つの世界観としての絵ができてくるはずです。

今、ここで言いたいのは、stage of romance というものだね。個々の知識を確かめていく。ことばの問題でいうと、最初に

stage of romance というものがきますね。子どもは、何だかよくわからないけれども、おとなが使っていることばを覚え込んでしまうのだ。これは理屈で説明して、こうだからこういうふうに考えなさい、というのではなくて、物語として、これを覚えてしまうのだね。

ピアジェは自己中心というものを最初に考えた人です。しかし、自己中心というのは、聖書にでてくる一粒の麦のようなものですよ。この一粒の麦が、このままでいたら、おしまいなのだけれども、この麦が、だんだんわれてきて、だんだん大きくなっていく状態が、ego が、自己中心がこわれていく状態、自己中心が成長していく状態なのです。この自己中心を成長させる役割りをしている、つまり、自分が分化していく、一つの種が成長していく刺激になるのが、物語だとピアジェは言っているわけです。それも、romance の段階の重要なものなのです。実際、今の子どもたちには、物語というものがなくなってきているように思います。保母さんたちも、あんまり物語らなくなって、心理学の特殊用語をちょっと覚え込んでいて、それだけで間に合わせるように考える。自分のロマンティックな、まだ、はっきりと説明がつかないけれども、全体についての自分の感じ方の中から生まれてきた見方があるわけだね。そういうようなのが物語の時代なのだけれども。

ところで、私が、今いおうとしているのは、教育というのは、あなたがたは、私たちは、幼児教育を分担しているんだ、分業でやっているのだ、というかもしれないけれども、分業が成り立つためには、全体の見通しがなければ、分業に意味がでてこない。うっかりしていれば、何をやっているのかわからないことをやっているわけだね。つまり、全体はどうなっているのか、と全体についての見通しがあってこそ、分業は、成り立つわけです。そこで、私が、いおうとしているのは、現在の教育の中で、ホワイトヘッドが、romance の段階の教育といっていることが、どんどん他の機械的で、人間の欲にからんだ、個人的利益にくっついた教育となってあらわれ、それが、知識の教育だ、と思われているのだ。何でも知識をもっていれば、人に勝てるという迷信みたいなものがあって、それで、私は、そういうのとはちがうので、まごまごしている人間だ、と、さっきから言っているのです。

私が、いおうとしていることは、幼児期というものは romance つまり、物語の時代なんで、知識の時代ではないのだということ。そして、そこのところが、どんどんだめになってしまえば、それからあとの教育は、全部だめになってしまう、といおうとして、今、こういう問題をいっているのです。

今、ここにもってきた本は、寺田寅彦が昭和四年にかいたものです。寺田寅彦は、物理学者で、同時に文学者です。ホワイトヘッドという数学者も、同時に、文学者なのです。つまり、科学者

の方が、文学というものに対して、非常に深い関心をもっているのだね。で、科学について、素人の人が、科学を迷信にしているのです。科学者になるためには、人間は、一つの憧れをもたなければならない。寺田寅彦が、昭和四年に、化物についての非常におもしろい文章を書いた。そのことをお話ししたいのです。

stage of romance、これは、精神が発酵して、何かを求めている状態になるというのが romance の段階なんだね。発酵しないものは、後のためなのだから。今の人間は、そもそも、子どもの時から、人間として発酵してないんだね。つまり、何か求めている状態がなくて、求めているものは、単に、世界にある刺激と、物質的な享楽なんだね。これは、非常に危険ですよ。そういう意味では、romance の段階にある幼児期、あるいは、その後にも来るのですけれども、何か、ほんとうにその気になって、自分一人で、やっていくという状態になる前に、真理というものを求める心が、発酵してくるという状態が起こらなければ、その後の教育は、やりようがない。

もっと、普通の言葉で言えば、イギリスなんかでも、そういう言葉が非常にはやっていますけれども、一体、子どもたちは、生まれてきたんだけれども、十九世紀や、その前の時代にくらべて、勉強する気がないのではないか、ということ。幼児の時代に、romance の時代に、真理というものが、わかってしまったら、しようがないわけでしょう。幼児の時代に、非常に大きな真理があるのだということ。それを知りたい、あるいは、それを、美という言葉で言ってしまってもいいのですけれども、非常に、宇宙の美しさがあるということ。それは、真理というもので、そして、その大きな宇宙の運動、あるいは、自然の美というものの中に自分がいるということに驚きを感じる、というのが、romance の段階で、そこで、精神と肉体は、一つの発酵状態を経験するわけです。そういう段階を経ないで、知識の教育が行なわれるということになると、その知識の教育は、個々のもので、その知識全体の関係がついてこない。意味をもってこない知識、つまり、教育によって、精神はたるんでしまう、退屈した状態になってしまうものだ、というのが、ホワイトヘッドの見方なのです。

寺田さんの化物の進化、これは長い文章ですけれども、人間文化の進化の道程において、発明され、創作された、いろいろの作品の中でも、化物などは、最もすぐれた傑作といわなければならない。化物も、やはり、人間と自然の接触から生まれた正嫡子であって、その出入りする世界は、一面には宗教の世界であり、また、一面には科学の世界である。同時にまた、美術の世界でもある。で、最初に、こういう化物の世界があるのだと思う。ところが、今は、おとなでも化物なんていうものを、（ほんとうは、おとな自身が、今、化物になっているのだけれどもね）自分では気がつかないのだけれども。

化物の世界、これは、坪田譲治の童話の世界なんかは、化物の

世界なのです。そういう化物の世界というのは、寺田さんによると、人間が創造した傑作なんだね。これは奇蹟ということばでいってもいい。ところが、ぼくらは、今、不思議なものは、全部ないように思い込んでしまっている。そして、寺田さんは、各民族にはいろいろな化物があり、つまり、いわゆる科学的には、説明のつかない物語がありますね。各民族の化物には、民族の宗教と科学と芸術とが総合されているんだ。それは、民族の romance の段階で、民族が作り上げたものだね。その民族がまだ、子どものように素直で、無邪気で、この自然界にある。あるいは、この自然界と人間の世界が作りあげている不思議な状態について描き出した物語ですよね。そして、寺田さんは、科学教育が非常に重要だ、といっている。科学者になるにも、芸術家になるにも、それから、宗教家になるにも必要だ、といっている。

ところが、今の子どものことを考えてごらんなさい。今の子どもたちは、何にでも、すべて割切るという状態になってしまっています。あれは、子どもではないと思う。あれは、小さな、生きていてもあまり意味のないおとなだと思う。

化物教育。つまり、化物というと、わからないことがあるわけでしょう。わからないことがいろいろあって、不思議で、これが一つの物語になっている。わからないものがあると、この不思議なものの中に、自分が生きている驚きが、人間が人間になるために必要なんだね。で、寺田さんは、このような化物教育は、少年時代のわれわれの科学知識に対する興味を疎外しなかったばかりでなく、かえってむしろ、ますますそれを鼓吹したように思われる。これは、一見、奇妙なようでもあるが、よく考えてみると、むしろ当然のことでもある。皮肉なようであるが、われわれにほんとうの科学教育を与えたものは、数々の立派な中等教育よりは、むしろ、長屋の十兵衛さんと友人のNであったかもしれない。これは、必ずしも、無用のへんちき論ではない。

つまり、常識では、はかりがたい世界というものがあるわけです。子どもたちは、最初に、現代ならこの現代という時代では、この常識では説明することのできない大きな世界に驚かなければいけないのだね。もっと後の方で、寺田さんは、こう書いていますけれども、化物がないと思うのは、かえって、ほんとうの迷信である。ここが非常に重要だと思う。何かわかっているとみんな思うけれど、そうわかっちゃいないのですよ。わかっていると思うことで、人間は、自己満足しているだけで、わかってないわけです。宇宙は、永久に懐疑にみちていますよね。寺田さんがいうように。

だから、ぼくは、アポロ十一号の月着陸というのは、あれはいかにも説明がついちゃっておもしろくない。もっと宇宙は、神秘ですよ。ぼくは、月に行ったということは、月と地球の関係を考えることの方が重要なのだと思うのだ。この太陽系の惑星のうちで、地球の衛星である月は、最も大きな衛星なのですから。あれ

が大きかったので、地球の潮の満干なんかも、非常にいい具合に起こって、地球に生命が育つのに、あの死んだ月が役に立っているのだ。つまり、死んだお母さんみたいになっちゃうのだけどね。

文学の中には、そういうふうにでてくるよね。あの小川未明の童話で、お母さんが死んじゃって、お月さまをみると、死んだお母さんがあそこにいるというふうにでてくる物語がありますけれども。あれは、生命がないように、あそこに死んでいるわけですが、あの死んだようにみえる月が、地球のそばにあったので、地球の生命は、いい条件で育ったのではないかと思うのだね。

人間という生物は、一体、この全体の宇宙の中でどういう役割を負っているものであるか、と感じる方が、もっと宇宙の神秘ということがわかります。そしてその方がもっと重要なことです。寺田さんは、普通の人は、科学がなんでも説明できるようにいっていますが、それは、間違いなので、化物がないと思うのは、かえってほんとうの迷信である。そして宇宙は、永久に懐疑に満ちている。それを、ひもといて、懐疑に戦慄する心持ちがなくなれば、科学は、もう、死んでしまうのである、といっています。

われわれは、今、地球はもっと一つになるものであり、そして、大きな宇宙の中で、地球の人類がどういうところまで進化していかなければならないかと考えてみると、そういう運命を担っているのが、今の幼い子どもたちなのです。そうしてみれば、幼児の時期に、ただの化物でいいわけではないのだが、非常に大きな宇宙を含めた人間が、生きてきたこれまでの過去と、現在生きている人間の世界では、非常に大きな不思議なものがあるということに驚く心がなければ、つまり、そういう発酵が起こらなければ、知識の教育は意味をもってこないわけです。

寺田さんが、もう一つその前に書いているのは、非常に短い文章で、名文なんだけれども、これも、ぼくは、romance の段階において、子どもがやらなければならないものだと思うのです。romance の段階というけれども、アーノルド・トインビーの「現代のようになってきてしまうと、教育は、一回で、教育は大学を卒業すれば、それで間に合うような時代でなくなってきた。教育は、一度ですむのではなくて、生涯通じて、何度も、教育をしなければならない。何度も教育を受けるということが、これからの教育の姿だろう。一度大学を出ておけば間に合ったというのは、もう過ぎ去った時代のことなのだ」という考え方からいえば、おとなたちも、また、幼児たちと同じように、romance の段階をもたなければなりません。

非常に安値に、人から借りた真理で、人から借りた知識で、全部わかった、こんな気がしてはいけないのだね。非常に大きなものと、現代の人間は、とりくんでいるはずですよ。大きな真理という不思議なものがある。真理の大海がある。それに驚いて、謙遜にならなければいけないので、その意味では、聖書の中に予言されているように、「幼子(おさなご)のごとくならずば、天国の門は、開か

れない」ということは、現代のすべての人がもっている宿題なんだと思う。おとなたちは、子どもたちの本来の姿を、一方では、こわしています。そして、おとなたち自身が、すくいのない状態になっている。

その意味では、寺田さんの短い文章は、ぼくは、前から好きで、これは、大正九年に書いたものです。おとなたちも、こういう気持ちをもっていなければいけないので、それで、子どもたちも同じように、こういう気持ちでいなければいけないのだと思うのです。日常生活の世界と詩歌の世界というのが、この名なんです。ぼくは、この考えは、今、ヨーロッパでよくいわれている、非常に大きな問題になっている構造主義という考え方と、一つ共通していると思います。これは、言語の問題です。言葉とか、イメージとかいう問題の重要さ、人間が自然をみる、世界をみる、それから、いろいろなことを解釈する場合に、人間の中で生まれてくる言葉と論理とは、一体、なんだろうという問題につながるわけです。

寺田さんは、この詩歌の世界というのが科学の世界の土台になるのだといっています。詩歌の世界というものがなければ、科学というものには、ならないわけです。つまり、非常に大きな真理の前に驚いて、これを求めるという気持ち、発酵状態が起こらない限り、ほんとうの科学は生まれないわけです。

寺田さんは、「日常生活の世界と詩歌の世界の境目は、ただ一枚のガラス板で仕切られている。一枚のガラス板は、初めからくもっていることもある」つまり、食って、着て、安らかに死んでいく、これ以上何も知らない人もいますよね。しかし、これは、動物としては、非常に美しいけれども人間としては、あまり美しくない。このガラス板は、はじめからくもっていることもある。生活の世界が塵に汚れてくもっていることもある。生活の世界。つまり、肉体的生存の世界。人間の動物的な世界。それが、ぼくは、今、非常に汚れていると思いますよね。そうすると、日常生活の世界と詩歌の世界つまり、真理とか科学の世界とをくぎっている一枚のガラス板があるのですけれども、このガラス板が初めから、くもっていることがある。これは、生活の世界の塵に汚れてくもっているようなことかもしれない。

つまり、あんまり欲が深くて、自分のことばかり考えていると、ガラス板はくもって、ガラスの向こうは見えない。この二つの世界の間の通路としては、通例、小さな穴があいているだけである。しかし、しじゅう、二つの世界に出入りしていると、その穴はだんだん大きくなる。これは、詩歌の世界がわかる、つまり、象徴の世界がわかるのだね。言葉でつかんでいる世界がわかるのだね。不思議な大きな世界が、このガラス板のむこうの、それは、宗教の世界でもあるし、科学の世界でもあるのだよ。

そこで、ぼくは、教育というのは、幼い時に、この穴を出入りさせることを覚えさせることだと思うのだ。アイスクリームを食

っている時だけが、幸せだというのではね。今、そういうふうになりつつあるのですよ。テレビをみている時だけ、生きている感じがして、それをみ終わったら、だらんとしちゃっている。ほとんど怪物に近い状態になっているのだ。しかし、しじゅう、二つの世界に出入りしていると、この穴もだんだん大きくなる、しかし、この穴は、しばしば出入りしないでいると、自然にだんだん狭くなる。ここへ出入りしなければいけないのですよ。人間は、詩歌の世界なのだ。そして、これは、真理の世界なんだ。言葉という、あるいは数学の符号という、不思議な人間だけがもっている象徴をつかって、無限の世界というのに出入りしなければならない。無限といってもいいし、宇宙といってもいい。われわれの過去というのも、われわれにとっては、不思議な世界ですよ。どこまで、五億年昔まで、ずっと続いている地球の過去がある。無限の世界だよ。ここに出入りしなくてはいけないのだから。

ある人は、初めから、この穴の存在を知らないか、知っていても、別に探そうともしない。これこそ、ほんとうに暢気だ。これは、もう何だか、食って、飲んでいる時に、非常に気嫌がよくて、まあ、そういう人もいい。それは、ガラスがくもっていて、反対側が見えないためか、あるいは、あまりに忙しいために。だから、あんまり忙しくてはいけないのですよ。ぼくは、あんまり事務的じゃないから、ガラスのむこうにいっている時が一番気持ちがいい。あんまり人がくると、こっち側にいなくちゃならないからね。やっぱり、一枚のガラス板の向こう側を見れるという時が、ぼくにとって一番気持ちがいい。つまり詩が書けそうになっている状態。真理というものが、みえてきそうになっている状態というのが、ぼくにとって、興奮するいい状態なのです。

だから、あんまり忙しいと、これが見えなくなっちゃう。だから、教師たちは、あんまり忙しくてはいけないのです。さぼっていなさいということではないんだ。それは、バートランド・ラッセルがいっている idle ということなんだね。忙しいということ、ラッセルは、idle と lazy という、二つの言葉を使っているわけですが、両方を日本語に訳すと、怠けるということになる。idle というのは、悪を犯すということを伸ばしているということなのだね。何でも、早くやってしまえばいいというのではないのだね。それが idle ということで、idle こそ、人間のいい性質なんです。というのは、体に何の気力もなくて、怠けるということなんだ。lazy では人はいけないけれども、人間の人間たるゆえんは、idle なところにある。何でもすぐに、やってしまえばいいというのではない。おそらく、ラッセルの idle というのは、忙しくしているというのではなくて、考えながら生きている、つまり、イギリス人特有の、歩きながら考えるという状態です。

「穴をみつけても通れない人がある。それは、あまりに体が太

りすぎているために」ここで寺田さんが言っているのは、あまり体が太りすぎているという言葉で言っているのは、ごう慢でありすぎるから、ということだ。体が太っているだけでなく、人の考えなども、受けつけないのだね。そういう人がいますよ。しかし、人の考えをも、受けつけなくなったら、その人は枯木ですよ。人の考えもわかるということが生命もまた、若いということだ。しかし、そんな人も、病気をしたり、貧乏をしたりして、やせたために、通りぬけられるようになることがある。そこで、やっぱり、病気をしたり、貧乏したりすると、空をみても、空がきれいにみえてくる。非常な不幸を経験すると、寂しいということが、わかってくる。木の葉のそよぎなんかも、前なんかとはちがって、きれいにみえる。雑草の花なんかも、きれいにみえてきます。それは、ガラス板のむこうの世界に出入りすることができるようになったからです。

そして、最後に寺田さんは、「まれに、きわめてまれに、天の炎を取ってきて、教会のガラス板をすっかりとかしてしまう人」これは天才のことですよ。つまり、ガラス板をすっかりとかしてしまうのだね。シェークスピアみたいな人だね。ピタゴラスみたいな人だね。アインシュタインみたいな人です。そういう人がいるので、われわれは、人間らしいものをもっているわけだけれども。全部が、ガラス板のこっち側ばかりにいるのだったら、もう、人間は、けんかばかりしていて滅びてしまうにちがいない。各人を越えた、大きな真理があって、その真理の世界に出入りし、美の世界があって、これに出入りしている。このガラス板の向こうへ、行ったり、来たりしている人がいるわけだね。そういう人がいるから、わたしたちは、人間としてもっているんだね。皆、こっち側で、欲のために自分ばかり主張していたら、人間は滅びてしまうだろう。

こういうお化の世界。それから、寺田さんがあとで言った、一枚のガラス板の向こう、つまり、詩歌の世界と物語の世界と、日常生活の世界を出入りすることができるようにすることが、教育の仕事であって、これは、幼児の時代だと、これは、物語の時代なので、真理というのを、冷たい知識として教える時代ではない。お化の世界、一枚のガラス板の向こうの世界、（これ、不思議な世界ですよね）というものを、寺田さんは、人間の心が成長するのに、非常に重要な役割をしているといっているのです。

そのお化の世界みたいなものを、まず、言おうと思っているのですが、このお茶の水大学の、外山滋比古君が、修辞的残像という本の中で、やはり、それと同じ問題を出しています。それは、童話の世界というのです。この童話の世界というのは、つまり、神話でもいいのですが、これは、人間が、この世に生まれてきて、はじめて聞く話なんだね。それは、今の子どもたちは、毎日の生活が、ある意味では退屈しているし、ある意味では、不安な

のだ。その中で、子どもたちに、与えられている物語には、非常に刺激的な物語が多いのですけれども。しかし、外山さんが言っているように、童話という、つまり、お化の世界みたいに、「昔々、あるところに」という、つまり、今日、ここにあったというようなことではなくて、どこにでもあったような、時間と空間を越えた一つの物語の世界というのが、ここで、できるわけだね。そういう物語の世界というのは、いろいろな小説、その他の、おとなたちが今、かいているものの原型になっているもので、物語のうちで、最もすわりのいい物語だといっているんだ。それは、変わっていくものの中で、変わらないすわりのよさをもっている物語なのだ。で、それを外山さんは、こまをまわした時の、こまが非常にすんだ状態でまわっている時の中心部みたいなものが、童話なんで、それは、すわりのよさをもっているといっている。そういうものが、幼児の時代に、romance の段階として、与えられなければいけないのだ。

この問題は、この問題でたいへんおもしろいのですが、私は坪田譲治の童話の中に、まだそういうものが残っていたように思います。坪田さんの谷間の池というのを、はじめの方ちょっと読むとね、ここで、スーッと世界が浮んできますよね。なにか、自然の中に、ちゃんと人間がいるという状態がでてきます。で、ぼくは、いい例がみつからないから、これをもってきたのですけれど。坪田さんの谷間の池の書き出し。

「今から、四十年も昔、明治の頃の話であります。ある夏の日の朝早く、岡山の町から三キロばかり離れた、草深い田舎の田んぼ道を、おじいさんと子どもが歩いておりました。おじいさんはさおをかつぎ、子どもはかごをさげておりました。二人は、これから、山のかなたの谷間の池に、鯉やふなをつりに行くところであります。さて、道が二つに別れているところにきました。すると、さきに立っていた子どもが聞きました。おじいさん、どっちに行くんならな。おじいさんが言いました。まて、こういう時こそ、おじいさんおばあさんをやってみにゃならん。そうじゃろうがといって、二つの道を指でさし、じいさんばあさん、どっちの道にしようかなあ。そりゃ、われのかってにしゃらんせいといいました。すると、指は右の方にとまりました」

この後の方は、どっちでもいいのですけれども、この書き出しのところで、何行か、ずっと読むと、大きな自然の世界が、ずっと浮かんできますね。ここに、おじいさんと子どもがいっしょに歩いているというね。すべてのものを含んだ自然というのが、パッと浮かんでくるというようなものが、今の子どもたちにはなくなったように思います。それが童話とか、つまり、すわりのいい話だね。お化の世界というものがもっていた、不思議な魅力です

よ。それは、個々のことを説明しているのではないのだ。ここに、全体の美しさが、パッと現われるというものだ。それが、romance の時代にふさわしいものなのです。

そういうことを、外山滋比古さんの童話の世界というものも、かなり、お化の世界、童話の世界がもっている人間の成長のために、最も必要な、だんだん成長するに従って、個々のもの、変化する部分というのは、もってきますけれども、すわりのいい中心部というのは、なければならない、ということを追求しているわけです。

はじめに、むずかしくて、あまりうまく話ができそうにない、といいましたが、ぼくが話していることが、ぼくにもうまく言えないのです。生物学の柳田さんと、ここで夏、講習会をやると、保母さんたちが集まってくる、あのふんい気は、独特なふんい気で、あれは、女というものがもっている、不思議な力なんだ、と、話しあいましたが、ぼくは、ずい分前に、保母さんがたくさん集まった時に、やっぱり、女というものが、生命を育てるということに、独特な感受性をもっていると感じました。それから、実行力をもっている、これは、説明のつかない、神秘力なんだね。

今、敗戦後二十三年間、日本は単に、物質的に豊かになった。日本の歴史の中で、これほど、日本人が物質的なものにおぼれこんでいる時代はないと思います。こういう、間違った道を歩いてきてしまっているので、何とも説明がつかないけれども、皆さんの気持ちには、日本の幼児たちの中に、日本の輝くような未来を感じようとしているのだという感じが、ぼくには、前からある。

私は、園長として、ここに四年おりますけれども、四年間の間に、皆さんといっしょに、つまり、日本の社会がどうなっていくかということ、つまり、小さい子どもたちの問題を、ほんとうに考えていくことによって、日本の道が見つけ出されるというふうにやっていきたいと思います。そういうことで、ぼくがやれるだけのことをやってみたいと、考えているので、協力していきたいと思います。

また、大学の教師としては、テアード・シャルダンのように、現代の非常に大きな問題を提起している人の考えを勉強して、つまり、考えというのは、その人の人柄と別個のものではありませんからね。そういうことや、構造主義という、つまり、人類の今までの歴史を全部ひっくるめてみて、文明社会の人間よりも、原始的な生活をしていた過去の人たちや、未開人たちの方が、人間として、はるかにいいものをもっているという、そういうのが構造主義の考え方で、同時に、その中には、人間が考えるという、あるいは、人間がもっている言葉というのは自分ではどうにもならない大地との関係の中で生まれているものだという、つまり、考えるというけれども、それは、思い出すということと、ほとん

ど似ているものだということ。

外から知識を与えるよりも、昨日久保君が、子どもたちに自信をもたせるといいましたけれども、つまり、自信をもたせるということは、どういうことか。自信というのは、ファイトをもつということだけではないんだね。ぼくは、自信をもつというのは、人間として、生まれた運命を素直に承認するということ、つまり、生きるという覚悟をちゃんとしてしまうことなのですけれども、それが自信をもつことです。子どもたちが、ほんとうに絵をかいている状態の時には、顔がよくなりますね。それが、自信をもった状態なので、その時には、小さな我なんかで行動しているのではないんだ。しかし、その人が生きていることに対してほんとうに責任をとっている状態ですね。それが、久保君がいっている自信をもった状態なので、この自信をもった状態になるということは、非常にたいへんなことなのだ。

そして今、現在の教育は、それと逆のことをやっているわけで、シモーヌ・ベイユが言ったように、資本主義の社会というものは、すべてが受動的でつまり、食わしてもらっているという状態ですよね。食わしてもらっている、つまり、自分がこの世界に対して、責任をとっている状態ではないんだ。その中で、うまく泳ぐという受動性なんですよ。つまり、すべて受け身で生きているのですけれども、そして、同時に、シモーヌが言っているように、現代の社会は、受動性と無方向という特徴をもっている。どこへ行ってよいか、わからない。

つまり、どこへ行っていいか、わからないことは、皆さん、折りにふれて感じているだろうと思います。一体、人間は、これでいいのかという、にもかかわらず、その中で、受動的に、自分は、何もできないんだ、という、そういう状態では、人間はずるくなるより仕方ないわけです。こういう状態の中で、資本主義は、つまり、自由主義といってもいいのだけれど、この自由主義で、資本主義の社会というのは、受動性と無方向だよ。つまり、主体性をもって、自分が生きていることを実行しているわけではないんだね。そして、その中ではシモーヌが言っているように、権利の主張という、フランス革命以後の迷信が必要以上にいわれている。

シモーヌは、すべての人たちが、これは、ロンドンで餓死をする前に書いた文章なのですけれども、自分の権利を主張するという、フランス革命以後の生き方をしている限り、この自由主義と資本主義の社会では、その権利の主張によって、人間は何も与えることがなくて、それは、際限のない闘争である。

教育というのは、そういう、自分が有利な位置につくための闘争ということに、もみくちゃにされている状態ですよ。現在は、その競争のために、人間は、自然を破壊し、自然を破壊するのと同じ程度に、人間が各人、もって生まれてきた人間性を破壊しているわけです。シモーヌ・ベイユは、デラシネという、つまり、

人間の根が切れた状態といっていますが、それはどういう理由で、人間が、根が切れた状態になってしまったのかというのを三つあげています。つまり、根が切れた状態で、自分のことがわからない。これは、枯れた木ですからね。根がついてない。われわれ、民族とか、人類には、根がついているはずです。その非常に深い所から、エネルギーがわき出してくるはずです。そういうものが、もう根から水を吸い上げてはいない、という、枯れた状態になっています。

で、シモーヌがあげているのは、その当時のフランスのことをいっているわけです。

第一は、日本に、ピッタリあうような気がします。人間が、根こぎの状態になっている、ということは、一人の人間の中に、人類の跡を受け継いでいるという責任感がない。人類が、ずっとここまで来たという、キラキラしたものを受け継いでいるという責任がない。そういう根こぎの状態というのは、まず、第一は、軍事的な占領によって、人間は根こぎの状態になった。フランスが、ヒットラーの軍隊に占領されていた時に、それはかいたものですけれどね。ロンドンの郊外で、餓え死をする前に、かいたものです。しかし、日本も、アメリカの占領という結果、自分でも意識しないうちに、われわれが、根こぎになっている。誇りをもって、生きているという顔には、出っくわさなくなりました。従って、おとながそうだから、シモーヌがいっているように、根が切れた人は、他の人の根をも切ってしまうものだと。

デラシネ（déraciné）、デラシヌマンという、つまり、根こぎにされた人間は、他の人をも、根こぎにするという、人間と人間の関係が、日本にも生まれてきているわけですよ。われわれは、日本民族を通じて、人類につながっているわけですからね。そして、人類から受け継いでいる。簡単には、さびない、シモーヌが言っているような、黄金のあずかり物を、みんなが、もっているはずですよ。そして、今、出口のない状態に、新しい出口を作ることを、われわれは、課題にもっているわけだ。第一は、軍事的占領によって、人間は、根こぎにされる。だから、チョコマカしながら、いろいろなへ理屈をいって、自分のことしか考えない人間というものになってきているんだ。日本民族に対して、責任をもって、生きているという実感は、どうしたって起こらないだろうと思うのです。しかし、それがなければ、そこに根がつかなければ、木は伸びていかないはずですよ。木は、花を咲かせないはずです。

ぼくらはやはり、こういう感じがするね。桜の木を、よく枝を切ってしまうと、ぐじゃぐじゃっと生えてしまって、花が咲かない枝ができるね。日本人であるといいながら、あの桜の木の花は咲かない。ただ、ぐじゃぐじゃっと、量的に茂っている、ああいう木のような感じがします。すっきりしてこない。

第二に、シモーヌがあげているのは、お金というものが、人間を根こぎにするものだ。お金がすべての問題を解決するというような所では、すべて、そこで、人間は、根こぎにされてしまうということも、ぼくは、確かだと思うし、それが、現実の日本のような気がします。お金では、買えないものがあるという実感が、われわれになければ、人間は、根こぎになってしまうだろうと思うのです。ところが、現在の日本の状態では、お金が勢力をふるっていますよ。ぼくは、テアード・シャルダンみたいに、お金というのは、血液である、と考えたいと思います。これは、全体の生きものである民族とか人類の体内を回って歩くべきもので、一ケ所に血液がとまっていれば、その民族は滅びますよ。これは、社会主義などという概念ではないんだ。実際、子どもも、子どもの幼い時代は、お金がすべてを解決するのではないと考えているはずですよ。おとなたちからみて、実に、立派だと思います。だけど、それはある年齢になると、お金の奴隷になってしまうわけです。それは、おとなたちが、お金の奴隷だからです。

第三番目に、人間がなぜ、根を切られた、なつかしさのない人間になってしまうか。意味のない人間になってしまうかという第三の問題としてあげているのは、現代の教育によって、人間は根こぎにされる。つまり、小さな穴を、日本人がよく使う言葉でいえば、重箱の隅をつつくような知識の習得ばかりやっている現代の、そして、もう一つ、プラグマティズムの色彩がとても強い、つまり、実用、すぐ明日、役に立つという振幅の狭いことばかりやっている教育によって、人間は、根を切られた人間になってしまうというふうに、シモーヌが言っている。これは、フランスについていっているのではなくて、全世界について、言っているのです。そして、特に、日本の戦後の状態にピッタリ合っているような気がします。確かに、日本人は、根こぎにされている。根がついて、育っている木のような感じはなくなりましたよね。たまに、教養も何もないおばさんが、いかにも根がついているように見えることがあります。

そこで、ぼくは、ハーバート・リードが言っているように、イギリスでも、知識人というのは、全部といっていいくらいオポチュニスト、つまり、日和見主義者になっている、という見方がありますよね。何か、少しぐらい知識をもっている人は、現代において、非常に日和見主義者で、その時の、つまり、たいせい便乗主義者で、ほんとうに責任をとって考えている人ではなくて、そういう意味では、ぼくは、いわゆる知識人というものに対して、すべての人は、疑問をもつべきだと思う。もっと、田舎にいる、何にも知らないおばさんみたいな人の方が、つまり、romance をもっていますね。反対に、割り切って、わかっているというふりをしない人がいますね。魅力のある人です。

私は、孟子のことを思い出しました。孟子というのは、ほんとうの教育者のような気がする。愚かな宋人というたとえがあるでしょう。「ある愚かな宋の人が、今日は、稲に早く花を咲かせるために、田んぼに行って、稲を一本一本ひっぱって帰ってきたんで、すっかりくたびれた、といって家に帰ってきた。朝から晩まで、ひっぱって歩いたんだろうね。今日は、稲を育てるのに、非常にいっしょうけんめいで、くたびれちゃったといって、家へ帰ってきたんで、田んぼがどういうふうになっているかと思っていってみたら、全部枯れていた」というのだね。

だから、教育は、そこばかりみてやっていてはいけないんだ、というのが孟子の考えなので、稲をひっぱりあげることではなくて、まわりの草を切る、草を取ってあげて、稲が育つということを待つことが教育なのだ、というのが孟子のたとえでした。

しかし、今、われわれは、孟子がそういうたとえによって、二千年も前に言った愚かなことを、ぼくらは、やっているように思います。それが、シモーヌが言っている教育によって、子どもが根が切られた人間になってしまう、根こぎにされた人間になってしまうという第三にあげている所に、あたるわけです。

今、こういうことを述べているのも、最初に言った、romance の段階が、われわれになくなってきているということなのです。romance の段階は、はっきり結論はつかないけれども、非常に大きな真理の前に、人間が畏敬の念をもって立つということなんだね。そのことによって、人間がもっている、人類を受け継いできた、自分でも意識しなかった能力が現われてくるという状態が、romance の状態でした。いい考えが生まれてくるとか、非常にすばらしい考えがわいてくるというのは、予定してわいてくるのではない。それから、言葉もそうでしょう。何かの機会に、孟子が惻隠の心という言葉でいったわけですが、ある一人の子どもが、今、おぼれかけている時には、何にも考えないで行動が起こるわけでしょう。ある人の前で、言葉を言う時は、その言葉は、最初に予定していなくても、無意識のうちにわき出てくるものでしょう。それと同じように、いい考えも、非常に創造的な考えも、自分ではじめに予定していたのではない。

だから、アインシュタインが二十五歳の時に、特殊相対性理論というものを考えたのは、その前にちゃんと、precision の段階があり、そして、もっと子どもの時分には、磁石なんていうものを、不思議な目で眺めていましたね。そういう子どもの時代があるわけだ。そして、一人で山の中で、バイオリンをひいて、山の静かさ、というものを味わっていたね。そういう、romance の段階があって、それから、数学が非常にできたから、少し数学をやったね。そして、突然、二十五歳の時、スイスで働いていた時に、特殊相対性理論という、二十何枚かの原稿なんだけれども、

これは、彼が予期していたことではない。天から降ってきたことなんだ。つまり、宇宙から侵入してきたようなものだ。

考えというものは、そういうものです。どこからわいてきたかわからないものです。そういう言葉、今、それを言葉としてとらえる、えらい言葉だけれども。ぼくらの日常生活だって、そうだと思うね。アインシュタインは、その自分の考えが、飛躍して、大きなものになってきたので、そのために、病気にかかって、二週間ねちゃったわけです。自分の考えの大きさに驚いて、病気になるくらいのことやってみたいよね。ところが、ちっとも病気にかかる可能性なんかは、普通の人にはないよね。テアード・シャルダンが、現代の人は、毎日のパンと、静かな詩しか考えていないのではないかといっている。人類は、かつては、そうではなかったよね。毎日、食って、祈れて、後は、静かに死にたいと。死ということも、みんな考えなくなっちゃって、食うことしか、考えない。人間は、これでいいでしょうかね。人間であるから、何かがあるはずですよね。何だかわからないけれども、人間を押し上げているものがある。人間というものになってみたいですね。キラキラしたものにね。

テアード・シャルダンの言葉で言えば、現代の人間は、三つの恐怖をもっているということも、つまり、現代の人間は、くるべき所まで、きちゃったわけで、あと、先どこへ行っていいかわからないわけでしょう。先、どこへ行っていいか、わからない。それは、皆さん、実感あるわけじゃないかな。死というのは、先にちゃんと、個人について待っているよ。死は、すべての人の終点ですよ。そのことも、あんまり考えない。現在のことを考えて、自分のことばかり主張しているね。ともかく、文明がここまで行きついてきたら。だから、月なんかは、あれは、多少刺激になりますよね。行きつく所まで、行きついてしまって、この先に、希望というものを感じるような、ワクワクしたものはないね。来る所まで、来ちゃったんだね。あとは、できるだけたくさんうまいものを食って、観光バスかなんか乗って、方々歩いて、あの顔みてごらん、つまらない顔しているよ、あのおばあさんたち。だって、やることがないらしい。何か、停止しちゃった、人類の歴史が、ここで停止しちゃった感じだね。戦争もやれないんだ。ベトナムなんかは、非常に立派にみえてきますけれども、あれ、戦争しているのではないんだ。ベトナムの人は、いい顔してますよ。しかし、全般的には、退屈した状態になってきているわけでしょう。そして、この退屈に慣れちゃっていますよね。

テアード・シャルダンは、現代人は、次の恐怖をもっているといっている。つまり、一人の人間の人格を理解することは、もうできないという、そういう恐怖をもっている。確かに、みんなそうではないかしら。人間は、ある機械の部分品のようにみられていますよね。ここに一人の人格があるんだ、ということを理解してもらえるという可能性を失っちゃっていますね。いろいろと、

ちがっているわけですけれど、やはり一人一人の人格が理解してもらえるということが、生きている喜びですよね。ところが、それがないんだな。お金を、どれだけもっているか、人より、どれだけぜいたくができるか、ということが尺度になってしまっているね。

第二には、何かを、一人の人間が成し遂げた喜びをもつことができない状態になってしまっている。食ってはいるけれども、生きているということはない状態。何か、その人が、一つのことを成し遂げたという喜びによって生きている意味がでてくるわけですよね。それが、今、ないのだと思う。

第三には、この現在、怠ってはいるけれども、生きているというか、精神的には死んでいるけれども、肉体的には、生存していますよね。肉体的生存が退屈だから、いろいろと、お化粧してみたり、目を黒くしてみたり、退屈しのぎに、いろいろやっている。週刊誌のエロ記事を読んでみたりして、退屈をまぎらわしているわけです。

しかし、ほんとうの意味で、人類に次の出口があるのかどうかね。それは、日本人が普通使う言葉で言えば、希望という、私が、今日、どんなに貧乏でも、この希望において、貧乏は耐えられるという。現在、何にも物質的には恵まれていなくても、私には生きがいがあるということが、今の人にはありません。つまり、一人の人間として、価値を認められるということもないし、一人の人間として、生まれてきた意味を表わすことができるような何かを成し遂げたという喜びもないわけだよね。そして、同時に、希望がないのだ。出口がどこにあるかわからないのだ。サルトルの芝居の中にあるように、出口なしですよ。だから、生きていて、死んでいるんだ。死ぬことさえ、もうできないんだ。一度死んだ人は、またもう死ねないのですから。だから、死ぬこともできないんだ。愛することもできないんだ。そういう状態に、今いるわけだよね。

こういう状態で、いいわけはないんだ。まして、子どもたちの中に、わたしたちが個人として死んでも、日本民族は生きているはずですよね。それから、現在、生きている人間が死んでも、なお、人類というものは、あるはずですよ。人間が生きている意味を、そういうものにとらない限り、教育というものは成り立たないと思う。今日、明日の利益のために、みんな争っているような教育は、真に、人間を根こぎにしている教育ですよ。これは、教育というものではないのです。そういう教育が、日本全体の教育であって、そして、そういう教育が、幼児の世界をおかしているんだ。

そして、もう一つ、テアード・シャルダンが、フランスの物理学者と話をしている時の話は、たいへん現代の問題をはっきりさせるのに役に立つと思います。その二人が、原子爆弾ができた

後、物理学者と、生物学者のテアード・シャルダンと話をしてまして、人類は、これで終わるのではないかと。この間、オリビエという人の本を読んでいましたら、その中に、テアード・シャルダンの解釈もでてくるのですけれども、パリ大学の、つまり、人の進化という、（お茶の水女子大学を卒業した人が、あれを訳しています。みすず書房）本を読んでいたら、人類は、ここまできたら滅びるのではないか。もうこれで、まず一段落して。

そうしたら、いろいろと説があるんだね。紀元二〇一〇年の六月一日で滅びるとかね。ともかく、変化の仕方が、非常に早くなってきましたからね。これ滅びちゃうかもしれない。人類は、ではどういうふうに、滅びるかというと。これはうそではないんだよ。そんなこと言うけれど、滅びないだろうとぼくも前に考えたんだけれど。もし、人類が滅びるとしたら、皆さん、どういうふうに滅びると思いますか。できるだけ、今のうちに、うまいものを食べておく。それは、つまらないのではないかな。できるだけ楽しんでいくという気持ちではないものになってくるんだと思う。そして、日本民族は滅びるのではないか、人類は、滅びるのではないか、と考える方が、問題がはっきりしてくると思う。ずうっとうまく行くはずだ、なんて思っているから、だんだん変になってしまうのだね。

そこで、テアード・シャルダンとある物理学者が話をして、物理学者は、それは、どういう状態で滅びるかといったら、それは、非常に熱くなって滅びちゃうだろうと。テアード・シャルダンは、それとは違うんだ。それは、非常に冷たくなって、滅びちゃうんじゃないかと言った。

それは、ケネディ大統領の時に、非常に利用された、アメリカのノーベル賞をもらう候補になっていた、ロバート・フロストという詩人が言っているのだけれども。死んじゃいましたけれども、ケネディ大統領がロバート・フロストに頼んで、ロシアに使いに行ってもらったわけです。で、ケネディ大統領の演説の時に、ロバート・フロストという年とった詩人をいっしょに連れていって、演説をしたのです。その時に、ロバート・フロストは、年とっていたし、詩の朗読をやるのを途中で、わからなくなっちゃったので、途中で、下りてきちゃったという、いい人です。あれは、全部終わりまで、やっちゃわないところがいい。そのロバート・フロストの詩にも、人類が滅びるというのは、うんと熱くなって滅びてしまうか、冷たくなって滅びるかという、短い詩があるのです。

だから、この問題は、人ごとではないのです。何でもうまくいくというふうに、たかをくくって考えているべきじゃないのだ。そして、滅びるということは、ぼくは、どうせ死んでいくのだから、などというわけにはいかないんだよ。ぼくというのは、やっぱり人類があってこそいるのだから。つまり、人類の方が大きいんだから。民族の方がね。ぼくのために、人類がいるわけではな

いんだ。ぼくは、やっぱり、人類に委託されて生きているのですから。そう思わなくっちゃいけないんですよ。ぼくが、かってに、わいてきたのではないのだから。その深さにおいて、今、ここに生きているわけですからね。

物理学者が言ったのは、熱くなって地球が滅びるということ。それは、何か、水爆か、原爆が連続して、何発も爆発することによって、地球の水がすべて重水素に変わって、そして、全部連鎖爆発を起こせば、火星まで黒焦げになってしまうという。そういう可能性は十分あるので、ぼくらは、科学者でないものだから、たかをくくって生きているけれどね。科学者は、そのことをいっしょうけんめい考えている。だから、そういうふうに物質の究極の神秘までわかってきたということは、人間にとって、それだけ人間は、責任をもった存在にならなければならない、ということなので、なりゆきにまかしているわけにはいかないわけです。そういう危険をはらんでいるのです。

もう一つは、テアード・シャルダンが、冷たくなって滅びるのではないかと言った。これは、また、非常に重要なことなのです。人間が、だんだん体温が下がってきてしまって、心に温か味がなくなって、つまり、ここで、ホワイトヘッドが言っている、romance の段階で、成長しなければならない人間の精神的発酵というものがなくなっちゃって、つまり、心の温かさ、物を感じる心、人の悲しみさえ、自分の悲しみと感じるんだね。宇宙の大きさをみていると、その宇宙の大きさが、自分の内に宿っているほど、この宇宙の大きさというものを、神秘に感じる心というものがなくなってくることを意味しているのだね。

つまり、人間の心は、今日のような状態だと、だんだん冷たくなってきちゃって、つまり、神経は、だんだんたるんできちゃうんだね。この中枢の、二〇〇億もある神経が、全体として作りあげているこの暖かさは、物質的な熱とはちがうわけだね。人間の考える力で、あたかも肉体の中に神が宿ったごとく、愛というものが、人間の中から輝き出すわけだよね。そういうものが、だんだんなくなってきていることも、ぼくは、事実だと思うのです。

現在、ほんとうに恋愛をするということは、むずかしいのではないかしら。ほんとうに愛するということさえも、むずかしくなってきましたよね。何か、ほんとうに冷たい状態で交渉しているわけですよね。なんとなく、だるい状態になっている。生きているということは、味わいを失ってくるわけです。生きてはいるのだ。しかし、何と味わいのないことが、また、危険を生み出す原因になりますよね。何か、めくらめっぽうに大きい刺激がほしいわけですよね。そういう具合に、人間が、だんだん冷たくなってきちゃう。つまり、昆虫というのは、冷たいでしょ。人間は、だんだん、昆虫に近くなってくるんだ。外にばっかり感じているんだ。内部の方で、物を感じて、内部の方に一つの世界ができあがるということが、なくなってくるわけです。そして、それで、人類

は、これで終わりになるというような状態、こういう危険を現在の人ははらんでいるわけです。そして、出口のない状態でいるわけで、この状態の中で、教育というものがあるとすれば、これは策略なんで、教育という名で呼んでいいかどうかわからないと思う。やる気にならせるということが、自信をもたせることなんで、それは、人間というものになった喜びだと思う。それが自信なんだね。

私は、どうもうまく言えませんけれど、テアード・シャルダンの言葉で、人間は、この状態から、次の状態へ変わらなければならない。今、ある意味では、ぼくは、創世紀の時代だといってもいいと思うのです。人類として、次の時代に出口が見つからない限り、人間は、滅びますからね。つまり、よどんでしまっている流れない川は、くさっていくより仕方ないわけです。ここに、流れを作らなくてはならないわけです。この流れを作るために、とりわけ、幼児教育というものによって、人類や民族に対して、責任を果たしたいというのが、ぼくの気持ちです。テアード・シャルダンは、こういうことをいっているけれども。水が冷たいかどうかということを知ることが問題ではなくて、私たちは、この川を渡らなければならないんだ。つまり、人類は、オリビエという人の、人の進化で言えば、人間を越えたものにならなければならないのだね。今、人間におぼれていますよ。人間であることに、いい気になって、それに甘えているというところがありますよ。そういう覚悟をしなければならないのです。

そして、もう一つ、テアードのことばで言えば、人間の心は、量を質に変える働きをもっているものだということ。量を質に変える力をもっているのが、人間の心なんだと。知識というものも、いろいろな量はあるけれども、それが、その人の内部において、質にかわるということができるはずです。従って、食物でも、その人は、カロリーだけで生きているのではなくて、その人を通じて、エネルギーがちがった質のものになってくる。

最後に、こういうふうにいいます。テアード・シャルダンの、愛の弁証法という、三つの周期です。これと、教育のリズムとを関係させて、考えてみようと思っていたわけです。同時に、構造主義の巨匠である、レヴィ＝ストロースの、野性の思考というものとの関係を考えてみようと思ったのだけれども、これはむずかしいから、宿題にしておきます。

テアード・シャルダンの弁証法で、あらゆるものを包括しているわけですが、物質も、人間も、宇宙の進化も、包み込んでいるわけですけれども。同時に、これは、教育の三つのリズムだと考えていいと思います。

最初の divergence というのは、一人一人が違っている、ということです。これが、ピアジェの自己中心ということ、あるいはお釈迦さまが、生まれた時に言ったという、天上天下唯我独尊と

いうこととも、関係をして考えてもいいと思うのです。この人は、世界に一人しかいない。赤ん坊もそうです。この世に生まれて一人しかいない。それが、divergence の状態だ。これは、一人一人が、みんな別個のものなんだ。それが convergence の状態になる。それが、他の人を知り、この世界を知るわけだよね。まわりのいろいろなことを知るわけだよ。そして、その人が分化してくるわけですよ。一粒の麦が、芽が生えてくるように分化してくるわけです。

そして、emergence というのは、新しいものが現われてくるということなのですね。これは、愛の弁証法という、非常に大きなもので、物質の構成から、土地の発酵から、人間の考える力が生まれてくることまで含んでいる一つの原則なのです。私たちの現在の教育は、全く無原則で、何かその場きりのことばかりやっているわけですね。何か、今やっている教育に、一つの、明治時代の言葉で言えば、世界のどこへ行っても、これは、間違っていないという原則の上に立ちたいと思いますよね。そうでなければ、ぼくらがやっていることの意味によって、われわれが慰められることができないわけですよ。たえず不安で、せかせかと、間違ったことをやりかねない状態です。

この divergence と convergence、つまり、一人の人間は、ずっと、どういう経験をしても、どんな保母さんといっしょになって、その保母さんとの心の交わりによって、この子は、変わりますけれども、それから、自然の美が、わかればわかるほど、この子どもの心は変わりますけれども、しかし、この子は、ちがってしまったわけではない。一つの人格ですよね。そして、いろいろなことがわかってくることによって、この一つの人格は分化して、この一つの人格は、違ったものになってくるわけです。テアード・シャルダンは、それを、イエスの二つのような姿で、人類の未来を考えるわけです。

この現在の人間が、ほんとうに愛の力によって、converge していくという、つまり、質のちがった人間になっていく。そして、もとの人間と、ちがってしまったわけではないんだね。そして、その後に、emergence というのは、一つの、予期もしなかったものが、現われるということだよね。人間の能力だってそうです。

人間の人柄、人格ね。一つの人間がもっている魅力というものも、それは予定して、できているものではないね。個々の、ちがった人間がいて、この人たちがいっしょにいて、そして、愛というものによって、converge するんだね。質が変わってくるのだね。そして、今まで、予期もしなかったものが、現われてくる。予想もしなかった人格が、ここに生まれてくる。予想もしなかった能力が生まれてくるという喜びが、教育という仕事なのだと思います。で、テアードの、プリンシプルは、物質の構造も、生命の発生も、人間の変化も、つまり、変化というものに、一つの道筋を与えているのが教育なのです。舵をとっているのが教育なの

です。

そういう意味で、ヘーゲルの、テーゼ、アンチテーゼ、ジンテーゼなどという、ああいう観念的なものでなくて、きわめて科学的な弁証法が、テアードの愛の弁証法です。愛というと、何か、男と女の愛ばかり考えるかもしれないけれど、そればかりが愛じゃないのです。愛というのは、物を作っていく力をもっているわけだよね。こういう原則に立って、幼児教育というものを見直さなければいけない。

そういう意味で、私は、最初に、園長になって、まごまごしながら、いろいろなことを考えて、ちっともまだ形を成しませんけれどもね。しかし、私は、孤独な夢想家として、大学の教授をしていたけれども、そして、今もやっているけれども、私のように間に合わない人が、ここの園長になったということは、何か意味があってのことだろうと、こう考えて、何か、ひとつやらなければならないと思っている。私は、一人ではやれませんから、ここの先生たちはもちろんだけれども、あなた方といっしょに、そのconvergeする状態になりたいと思う。そういうお願いを述べて、私の話を終わりたいと思います。

（一九六九年七月二十三日、お茶の水女子大学・日本幼稚園協会主催・幼児教育講習会の講演より）

（文責・編集部）

今月の参考図書

●幼児の心理発達的特質を見分けるために

幼児の心理的発達

山下俊郎著

A5判290頁
定価800円
〒90円

幼児の心についての科学的知識を養うために乳児から五歳までの年齢段階別幼児の心理発達をわかりやすく解説

●幼児の行動の評価にあたって

幼児教育の評価
―その観点と基準―

三木安正編
保育内容研究会著

B5判130頁
定価500円
〒90円

〝人間関係のプロセスの評価〟を観点とした幼児の活動に対する意欲・理解・行動・技能4面にわたる評価の試み

●指導記録の参考例として

幼児の生活と教育

海　卓子著

A5判350頁
定価450円
〒90円

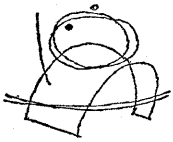
長年の保育経験から生み出されたユニークな幼児教育論集団生活を根底とした数々の指導記録及び指導の観点を含む。

フレーベル館発行

幼児の一日の活動について（三）

――活動の変化を中心として――

神沢　良輔
上平　多美・石坂　昭子
坂倉　哉子・原田　花子
上之郷瑞代・森川　祥子



幼児の一日の活動について、これまで二回にわたってみてきた。第一回（十一月号）では、幼児の一日の活動について、その中にみられる幼児の要求ということを中心として、その教育的意義や幼児の生活リズムということを含めて、一般的なことについてみてきた。そこで、第二回（十二月号）では、実際の保育場面における幼児の一日の活動はどうなっているかということを中心にして、四日市市立泊山幼稚園での研究をもとに、その発達をみることにした。この研究は、幼児の一日の活動の中から、いわゆる〝みずから選んで行なう活動〟や〝グループで行なう活動〟の場面を中心にして、幼児の活動を観察したものであるが、第二回は、その結果の中から〝幼児のはじめてとりくんだ活動〟を中心にしてみてきた。

そこで今回は、それにひきつづいてなされる〝幼児のはじめてとりくんだ活動〟のつぎの〝幼児の第二にとりくんだ活動〟と〝幼児の一日の活動の全体的な変化〟について〝幼児の一日の活動の変化〟ということからみていくことにする。

四、幼児の一日の活動の変化

(1)　幼児の一日の活動の変化の意味

幼児は登園してくると、まずなんらかの活動にはいる。もちろん、なにかしたいのだけれど、なにをしたらよいかということがうまくみつからなくて、身近にある遊具や素材を使って、ほんとうにしたい活動がみつかるまで、情緒の安定をはかりながら、い

わゆるウォーミング・アップ的な活動をしている幼児もいるだろうし、はじめから目標をもって活動にとりくみ、それに集中している幼児もいるだろう。いずれにしても、幼児はなんらかの要求や感情や意志をもって、つまり人間そのものとして、はじめてとりくむ活動へ入っていく。

そのようにして一日の幼児の活動がはじまるわけであるが、はじめてとりくむ活動は、当然つぎの活動になんらかの影響を与えているだろうし、つぎの活動はまたそのつぎの活動になんらかの影響を与えているだろう。そこに〝幼児の一日の活動の変化〟がみられる。

保育者としては、やはり、ひとりひとりの幼児の一日の活動の流れ（活動の変化）がどのようになっているかというこの全体を見通せなくては、ひとつひとつの幼児の活動の意味もほんとうに理解したことにはならないだろう。

逆にいえば、ひとつひとつの幼児の活動は、一日の全体的な活動の中に位置づけられてこそ、正しく理解したということになろうし、それがなくては、ほんとうの意味における指導がなされたということはいえないだろう。

もちろん、そこには、ひとりひとりの幼児の、また、学級全体の幼児の生活リズムがある。そして、それは、一日よりももっと長くて広い全体の生活リズムの中にさらに位置づけられ、それによって支えられて幼児は発達しているということになろう。そこにも、もっと長くて広いサイクルの生活リズムがあるのである。

しかし、実際には、幼児の一日の活動が、もっともその基盤になるのである。そして、幼児の一日の活動の変化を理解することであり、その後においておこなわれる、いろいろの幼児の活動を理解することになるとともに、そのような一連の活動の変化を予測することにもなろう。

このようにしてみてくると、幼児の一日の活動の変化を理解するということは、幼児の指導にとって、もっとも基本的な問題となる。

(2) 観察の手続

さて、これから、幼児の一日の活動の変化についての観察の結果をみていくことにするが、観察の方法は、ひと口にいえば、長時間見本法による自然観察法によったということになる。なお、この研究の観察の手続については、前号の〝幼児のはじめてとりくんだ活動〟で詳しくみてきたので、そちらを参考にしていただいて、ここでは省略することにする。ただし観察時間は、九時より十時二十分までの八十分である。

(3) 幼児の第二にとりくんだ活動

そこで、まず幼児は、〃はじめてとりくんだ活動〃のつぎに、どのような活動を選択するか、つまり〃幼児の第二にとりくんだ活動〃についてみていくことにする。

これについて、幼児はどのような活動を第二に選択し、どのような活動に多く参加したかについて、活動の種類ごとに参加者数を示すと第3表のようになる。また、全体的にみて、どのくらいの時間第二の活動にとりくんだかについて、その持続時間の算術平均と標準偏差を示すと第4表のようになる。

なお、幼児の活動の種類については、前号の第1表と同じ類型にしたので、具体的な活動については、第1表を参照していただきたい。また、二月は、幼児のはじめてとりくんだ活動が、そのままその日の主要な活動となり、第二にとりくんだ活動の意味があまり認められなかったので、第3表では二月を省略することにした。さらに、はじめてとりくんだ活動のみで、観察時間に他の活動をしなかった幼児については、その活動をもって、第二にとりくんだ活動とみなして集計してある。

第3表　幼児の第二にとりくんだ活動の種類と参加者数

種類＼月	5	7	10	12
	参加者数	参加者数	参加者数	参加者数
A　リズミカルな集団あそび			0(7)	
B　運動遊具による活動	2(9)	5(7)	0(6)	4(0)
C　構成的素材による活動			1(0)	4(1)
D　可塑的素材によるあそび	4(1)	1(3)		
E　ごっこ(役割あそびも含む)	1(2)	8(0)	12(2)	
F　絵画製作的な活動	1(2)	1(7)	0(2)	7(15)
G_1 絵　本			0(1)	
G_2 トランプ				
G_3 こままわし				1(0)
G_4 レコードをきく	3(0)		0(2)	
G_5 合奏および劇的な活動	1(0)	0(3)		
G_6 野外の雑草であそぶ	2(0)		2(0)	
H　人のあそびをみている	1(3)	2(0)		
N	15(17)	17(20)	15(20)	16(16)

注　( ) 内は女児を示す。なお，2月は第2のあそびがすくないので除く。

第4表　幼児の第二にとりくんだ活動の持続時間（分）

月	5	7	10	12	2
算術平均 (標準偏差)	18.4 (12.5)	34.6 (22.7)	38.3 (15.6)	42.5 (17.2)	61.2 (19.1)

さて、これらの表から、幼児の第二にとりくんだ活動について、幼児のはじめてとりくんだ活動と同様に、幼児の発達を中心にしてみていくことにしよう。

（i）

自分の身体的な生活リズムにあわせて第二の活動を選択する（五月〜七月）

① 五月から七月にかけては、幼児は、登園して〃はじめてと

りくんだ活動〃で情緒を安定させ、いわゆるウォーミング・アップがなされると、つぎに戸外での活発な活動に集中していく傾向が強く、とくに、五月においては、はじめてとりくむ活動が、いろいろな活動に平均して分かれて活動しているのに対して、著しく様相を異にしている。しかも、活動の持続時間についての算術平均をみると、はじめてとりくんだ活動（二十六分）より短くなっている（十八分）のは興味深い。

② つまり、はじめてとりくむ活動で、なにかの活動をしたいという要求により、保育室内の積木などの構成的な素材や、ねんどなどの可塑的な素材による活動や、製作的な活動という、どちらかといえば情緒の安定ということを中心とした活動をしていた幼児たちは、そこで一応の感情の表出をすると、つぎに、第二の活動として、幼児たちの生活リズムとして、活発な活動を要求し、そのような活動を選択していくということになるようである。

すなわち、入園当初は、静と動、緊張と解放、室内と室外というような、どちらかといえば、身体的なリズムによって、第二の活動を選択しているといえる。

③ だから、はじめてとりくむ活動と、第二にとりくむ活動との間に、活動の発展としての直接的な関連は認められないということになる。保育者は、このような幼児の発達の特徴をよく理解して指導する必要がある。

④ つまり、この時期では、幼児のはじめてとりくむ活動から、第二の活動へ連続的に発展させることには、相当のむりがあるということになろう。それより、むしろ個々ばらばらで連続的ではないが、ひとりひとりの幼児のそれぞれの活動をじゅうぶんさせてやるとともに、保育者は、幼児の身体的な生活リズムにあわせて、緊張と解放、静と動という組み合わせによるいろいろな活動がじゅうぶんできるように用意しておいてやることがたいせつである。

（ii）

はじめてとりくむ活動と、第二にとりくむ活動との間に関連ができ、活動の内容が連続する（十月～十二月）

① 七月でも、はじめてとりくむ活動において、構成的素材（積木）による活動をしていた男児が、そのまま〃ごっこ〃へと活動を発展させているというように、構成的素材が媒介になって、第二の活動へ連続しているということが一部でみられる。

② 十月になるとさらに発達して、はじめてとりくんだ活動の発展としての第二の活動がみられ、はじめてとりくんだ活動から第二の活動へと、連続して変化していくようになる。このような傾向は、十二月においてはいっそう顕著になってくる。

③ だからこの時期では、保育者は、幼児のはじめてとりくむ活動から、連続して第二の活動へと発展できるように、環境を準

備してやったり、援助してやることが必要になってくる。そのために、保育者には、つぎの活動を見通す能力が要求されるだろうし、幼児の活動は、その中で深まり広がっていくだろう。

④　また、この時期になると、幼児の活動は、今日から明日へと連続して発展するし、幼児によって、またはその日の生活リズムによって、はじめてとりくんだ活動と、第二にとりくんだ活動のどちらかが、その日の主要な活動になることが多いので、そのことも考慮に入れて指導することがたいせつである。

(iii)

はじめてとりくむ活動がそのまま一日の活動の主要なものになり、第二にとりくむ活動の意味がなくなる。

（二月）

①　十二月ごろからみられることであるが、幼児は、〝絵画製作的な活動〟などのように、集中して相当長時間を要する活動などでは、はじめてとりくむ活動が、そのまま一日の活動の主要な部分を占めるということになる。

このような傾向は、さらに発達して、二月になると、大部分の幼児にとって、はじめてとりくむ活動をそのまま長時間続けるということが可能になり、第二にとりくむ活動の意味はさらにうすれてくる。

③　だから、この時期においては、幼児の一日の活動において、幼児のはじめてとりくむ活動の意味がきわめて大きいということができるとともに、幼児が集中してひとつの活動にとりくむことができるように、保育者のはたらきかけや幼児の活動の見通し、またそれにもとづく環境の設定がきわめてたいせつである。またそれは、幼児の活動が、昨日、今日、明日という時間的連続の中で連続して発展しているためであり、昨日の活動の連続として、今日のはじめてとりくんむ活動に幼児が集中してとりくんでいるのであるということを理解しておく必要があろう。

④　だから、外面的には同じようにみえる一日の幼児の活動の流れについても、幼児のこのような活動にとりくもうとする構えやその質、また集中力において、幼児の発達によって著しく相違のあることを保育者はよく理解するとともに、このようなことは、幼児の自己をじゅうぶん表現していく活動のなかでしだいに発達してきたものであることに留意すべきである。入園して以来、幼児に自己をじゅうぶん表現したいという要求を満足させ、そのためにじゅうぶんの時間を与えてやらなければ、幼児が集中して活動するということが可能になるということを保育者は、幼児の指導にあたって、まず念頭におくべきである。

(4)　幼児の一日の活動の全体的な変化

最後に、幼児の一日の活動の変化について、ここでは、幼児の

自己をじゅうぶん表現する活動の中で、幼児が活動をかえた回数、それらの活動のなかでの最高、最低の活動の持続時間という全体的な面からみていくことにする。

なお、前述のそれぞれについて、算術平均および標準偏差を中心にして示すと第5表のようになる。

また、参考のために、幼児の一日の活動の変化を、個人を単位として、選択した活動の種類およびその順序、活動をかえた回数、最高、最低の持続時間について示すと第6表のようになる。

さて、この表についても、これまでと同様に、幼児の発達を中心にしてみていくことにする。

つまり、五歳児一年保育の幼児の幼稚園における一日の活動を、幼児の自己をじゅうぶん表現する活動を中心にして、活動のかわった回数、および、それぞれの活動の持続時間という面からみると、幼児の発達は、入園当初の五月までと、七月から二学期にかけて、および三学期と、大きく三つの段階に分けて考えることができる。

第5表　幼児の一日の活動の中での活動のかわった回数，最高・最低持続時間

	活動のかわった回数	最低持続時間	最高持続時間
5　月	3.8 (1.1)	11.5 (4.2)	38.4 (11.6)
7　月	2.4 (0.9)	28.0 (22.3)	54.8 (15.8)
10　月	2.5 (0.2)	24.4 (18.5)	46.3 (14.5)
12　月	2.2 (0.8)	28.1 (29.8)	50.0 (19.1)
2　月	1.5 (0.6)	60.0 (27.5)	67.9 (11.3)

注　（ ）内は，標準偏差を示す。持続時間の単位は分で示す。

（i）

情緒の安定のため、いろいろな活動をしてみたい

（五月）

① 入園当初においては、幼児にとっては、情緒の安定化のために、いろいろな活動をするということもたいせつなことであるが、それと同時に、自分のほんとうにしたい活動をさがしてみることもたいせつである。五月まではそのような段階であろう。

② つまり、そのことは、活動のかわった回数の平均が四回もあり、また、最低持続時間の平均が十分であるということからもうかがえよう。

③ それは、活動のしかたがわからなかったり、環境になじめないということや、交友関係がうまくいかないというような理由によることもあろう。

④ しかし、そのために、保育者はこのような幼児の実態にあわせて、いろいろな活動がじゅうぶんできるよう、幼児のために用意しておいてやることは必要である。幼児は、このようないろいろな活動をすることを通して、やがて見通しをもって活動をするようになるのである。このことは、第6表からもうかがうことができよう。

第6表　幼児の一日の活動の変化についての種類と変化の回数，最高・最低持続時間

氏名＼月	5月 活動の種類	回数	最低時間	最高時間	7月 活動の種類	回数	最低時間	最高時間	10月 活動の種類	回数	最低時間	最高時間	12月 活動の種類	回数	最低時間	最高時間	2月 活動の種類	回数	最低時間	最高時間
1	B-G4-B-B	4	10	30	C-B	2	20	60	B-E-D	3	20	40	B-B-F	3	20	40	G5	1	80	80
2	B-G4-B-B	4	10	30	C-B	2	20	60	B-E-D	3	20	40	B-B-F	3	20	40	G5	1	80	80
3	H-D-B	3	10	40	C-B	2	20	60	B-E-D	3	20	40	B-B-F	3	20	40	G2-F	2	20	60
4	E-G6-E	3	10	40	C-E	2	20	60	F-E	2	20	60	G3-C-F	3	20	40	G2-E	2	20	60
5	A-D-E	3	10	40	C-E	2	20	60	F-E-B	3	20	40	G3-C-F	3	20	40	G5	1	80	80
6	D-H-B-B	4	10	30	E	1	80	80	F-E-B	3	20	40	A-F	2	40	40	G5	1	80	80
7	H-D-B	3	10	50	D	1	80	80	欠				F-F	2	40	40	G2-E	2	20	60
8	欠				D-B	2	20	60	B-E-D	3	20	40	B-B-F	3	20	40	G5	1	80	80
9	C-G5-G6-E	4	10	30	E	1	80	80	欠				F-F	2	40	40	G2-G5	2	20	60
10	B-G4-B-B	4	10	30	C-B	2	20	60	B-E-D	3	20	40	欠				G5	1	80	80
11	C-D-E	3	10	40	C-H-D-F	4	20	20	F-E	2	20	60	C-F	2	40	40	欠			
12	B-B	2	30	50	C-E	2	20	60	欠				C-F-F	3	20	40	G5	1	86	80
13	E-G6-E	3	10	40	C-E	2	20	60	C-G6	2	20	60	C-F-E	3	20	40	D-G5-E	3	20	40
14	A-F-G6-B	4	10	40	C-E	2	20	60	F-E-G6	3	20	40	G3-C-F	3	20	40	F-G5	2	40	40
15	B-B-E-B	4	10	30	D-F	2	20	60	F-E-B	3	20	40	G3-C-E	3	20	40	G2-G5	2	20	60
16	欠				C-H-D-F	4	20	20	H-E	2	20	60	G3-C-F	3	20	40	G2-G5	2	20	60
17	C-E-G6-E-E	5	10	30	C-E-E	3	20	40	C-G6	2	20	60	C-F-E	3	20	40	D-G5-E	3	20	40
18	H-B-F-B-E-B	6	10	30	D-F	2	20	60	B-E	2	20	60	E-F	2	40	40	G5	1	80	80
19	E-B	2	20	60	C-B-F	3	20	40	B-A-F	3	20	40	F	1	80	80	G5	1	80	80
20	E-B	2	20	60	F-F-F	3	20	40	E-A	2	20	60	F	1	80	80	G5	1	80	80
21	G4-B-F-G4-H-B	6	10	30	D-G6-F	3	20	40	B-A-E	3	20	40	A-F	2	40	40	G5	1	80	80
22	欠				F-B-E	3	20	40	E-G4	2	40	40	F	1	80	80	G5-E	2	20	60
23	A-B-G6-B	4	10	40	F-F-F	3	20	40	F-E	2	20	60	F	1	80	80	G5	1	80	80
24	A-E-D-B	4	10	40	D	1	80	80	B-B-A	3	20	40	欠				G5-F	2	20	60
25	G4-B-B-G4-E	5	10	30	C-B-E	3	20	40	B-A-F-E	4	20	40	A-F	2	40	40	G5	1	80	80
26	A-B-G6-B	4	10	40	D	1	80	80	B-B-A	3	20	40	欠				欠			
27	欠				F-F	2	20	60	F	1	80	80	F	1	80	80	G5	1	80	80
28	欠				F-B-G1	3	20	40	F-G4	2	40	40	欠				欠			
29	H-B-F-B-E-B	6	10	30	D-F	2	20	60	B-F	2	20	60	E-F	2	40	40	G1-G5	2	40	40
30	H-D-C	3	20	40	F-F	2	20	60	F-B-F	3	20	40	H-F	2	20	20	G1-F	2	40	40
31	A-E-G4-B	4	10	30	F-F-F	3	20	40	E-A	2	40	40	F-C-F	3	20	40	G5	1	80	80
32	D-F	2	10	70	F-B-G1	3	20	40	F-G1	2	40	40	F	1	80	80	G5	1	80	80
33	D-F	2	10	70	F-B-G1	3	20	40	B-B-A	3	20	40	F	1	80	80	G5	1	80	80
34	D-H-B-B-F	5	10	30	H-D-F	3	20	40	F-B-F	3	20	40	H-F	2	20	60	G5	1	80	80
35	E-H-D-H-E-C	6	10	20	F-G5-H-F	4	20	20	E-B-F	3	20	40	E-F	2	20	60	G5	1	80	80
36	D-H-B-D-F	5	10	30	F-B-G1-C	4	20	20	B-A-E	3	20	40	欠				欠			
37	G4-B-B-G5-F	5	10	30	D-G5-F	3	20	40	B-A-E	3	20	40	A-F	2	40	40	G5	1	80	80

（注）　活動の種類の A～H の記号については第3表と同じであるので第3表を参照されたい。最高・最低持続時間の単位は分で示す。

(ii)

要求している活動はじゅうぶんにするとともに、他の活動もしてみたい　（七月〜十二月）

① 七月ごろになると、幼児たちは、自分の要求する活動をもって登園してくるようである。

② このことは、ひとつの活動についての最高持続時間の平均が、五十分前後になっていることからもわかる。つまり、幼児は自分の要求する活動へは、相当長時間とりくむことが可能になってくるのである。

③ しかし一方、活動をかわった回数が平均して二回以上あるということや、最低持続時間が平均して二十五分程度であるということは、幼児にとっては、他の活動も一回程度必要であるということを意味している。

④ それは、ある幼児にとっては、ウォーミング・アップとして他の活動が必要である場合もあろうし、逆に、要求している活動で自己をじゅうぶんに表現したあと、緊張の解消として他の活動を必要としている場合もあろう。そのために、一日にふたつぐらいの異った、または相似した活動を要求しているということがいえる。

⑤ これらの活動の質については、第二にとりくんだ活動のところでみてきたように、幼児の発達によってその差異が認められる。つまり、七月では、幼児の身体的な生活リズムを中心にして、活動が変化しているのに対して、十月以降においては、ふたつの活動は主として連続の中で選択されるという傾向にある。

⑥ いずれにしても、保育者としては、このような活動の変化をじゅうぶんに理解して、幼児の活動を指導していくことが必要である。すくなくとも、第6表でもみられるように、大部分の幼児が四十分〜六十分は集中して活動にとりくんでいるのだから、七月においてももちろんであるが、とくに十月以降においては、活動が連続して発展させられるように、活動の見通しをたてて、じゅうぶんに環境を用意しておいてやるとともに、活動を中断させないように配慮してやる必要がある。

(iii)

集中してひとつの活動にとりくみたい　（二月）

① 二月になると、最低持続時間と最高持続時間の差がなくなり、平均して六十分〜七十分となる。これは、活動のかわった回数が平均して一・五回になったということからもうかがえる。

② つまり、ほとんどの幼児が、活動をあまり変化させることなく、集中してひとつの活動をするということがいえる。

③ いずれにしても、大部分の幼児が自分の要求する活動を集中して最後までできるということである。そして活動を移動している幼児も、第6表のように、劇的な活動というひとつの目標の

もとに活動を変化させているということであり、実際には、目標をもって自分の要求を最後までしたということになろう。

④　そのためには、保育者としては、第二にとりくんだ活動でみてきたように、幼児の活動の連続と発展ということをじゅうぶん見通して、適切な援助を与えてやることが必要である。

(5)　幼児の一日の活動の変化についての指導上の留意点

この号では、これまで、幼児の一日の活動を、いわゆる幼児の自己をじゅうぶん表現する活動に限って、幼児の活動の変化を、幼児の第二にとりくんだ活動と、幼児の一日の活動の全体的な変化について、観察の結果から、幼児の発達という面を中心にしてみてきたが、これらのことからいえる指導上の留意点を以下に簡単にまとめてみよう。

①　入園当初においては、幼児は情緒の安定化のためにいろいろな活動の中から、自分の要求する活動をみつけだそうとする模索のための活動が多い。そのため、これらの活動の間に連続性をみとめることは困難であり、幼児は自分のもっている身体的な生活リズムにしたがって、つまり、静と動、緊張と解放というようなリズムにしたがって活動するということが多い。

だから保育者は、このような幼児の要求をじゅうぶんに満足させてやるために、いろいろな活動がじゅうぶんできるよう、室外においても室内においても、いろいろな素朴な遊具や素材をじゅうぶんに用意しておいてやることがたいせつである。

②　やがて幼児たちは、自分の要求する活動をみつけ、それに集中してとりくむようになる。十月以降においては、はじめてとりくんだ活動の間に関連ができ、活動の内容が連続するようになる。しかも、活動の変化が平均して二回程度であるから、はじめてとりくんだ活動と、第二にとりくんだ活動で、一日の活動が成立していくということになる。そして活動に集中できる時間も、四十五分程度とかなり長くなってくる。

だから、保育者としては、活動の連続と発展ということを見通して指導することがたいせつである。そのためには、幼児の活動を、昨日、今日、明日という連続と、一日の活動の中での連続という二面から理解していくことが必要であり、とくに、前日の幼児の活動のなかから、幼児の集中してとりくんだ活動を中心にして、翌日の環境を設定してやるとともに、幼児の活動が持続し、集中し、発展できるように、活動をできる限り中断しないようにすることがたいせつである。しかし、幼児の他の活動もしたいという要求もまだもっているので、その要求にもこたえてやらなくてはならない。

③　このようにして指導していくと、やがて幼児は、集中してひとつの活動にとりくむようになってくる。とくに二月において

はその傾向が強く、学級全体の活動の目標も理解するとともに、グループ（原則として四～五人が発達からみてもっとも安定している）にわかれて、その目標を実現したいという要求もでてくるようになる。

保育者としては、このような幼児の要求をじゅうぶん満足できるように、グループと全体との関係を調節してやるとともに、ひとつひとつのグループに対して、全体の幼児の活動が見通せるよう、じゅうぶん援助をしてやることが必要となろう。

そこで、もう一度これらの指導の基盤になっている、入園以来の、幼児の自己をじゅうぶんに表現したいという要求を満足させてやることや、幼児の一日の活動中での、くり返してする活動をたいせつにしてやる中で幼児は発達していくということを再確認しておく必要がある。つまり、活動の発展といっても、それは、毎日のくり返しの中で、大部分はわずかずつ変化していくものである。

五　おわりに

これまで三回にわけて幼児の一日の活動についてみてきた。

つまり、第一回（十一月号）では、幼児の一日の活動について、幼児の要求を中心にして、主として理論的な面から、第二回（十二月号）では、幼児のはじめてとりくんだ活動について、今回は、幼児の一日活動の変化についてみてきた。しかし、まだ、幼児の一日の活動と、週、月、学期、一年というもっと長期にわたる活動との関係や、一日の幼児の活動の中で自己表現的な活動と学級全体でする活動との関係、幼児の一日の活動の中でのくり返してする活動について実践面からみた問題点など、まだまだ基本的な多くの問題については、じゅうぶんに考察していくことができなかった。これらの問題についてはまたの機会にゆずりたい。

いずれにしても幼児の一日の活動について三回に分けてみてきたが、これらはいずれも相互に深い関係があり、とくに指導上の留意点については全体のまとめを省略したので、それらをまとめて考えていただければ、実際の指導の上でなんらかの参考になるのではないかと思っている。

（完）

（註）以下の文献も参考にしてください。

1　日本保育学会　第22回大会研究発表集　頁15～16　昭44

2　四日市市立泊山幼稚園　幼児にのぞましい経験や活動をもたせるには　――保育の過程を中心にして――昭44
沢神良輔・（四日市市立納屋幼稚園）
（上平多美（橋北幼）・石坂昭子（泊山幼）・坂倉哉子（富田幼）
原田花子（海蔵幼）・上之郷瑠代（泊山幼）・森川祥子（泊山幼））

及川平治の幼稚園保育（二）

久保いと

大正初期の明石附属幼稚園は、ひきつづき『保育方針並ニ幼稚園内規』にそって運営されていたものと考えられます。そこでは幼稚園教育の目的を、「附属幼稚園ハ幼児ヲ保育シ本校生徒ニ実地保育ノ練習ヲナサシメ兼テ家庭教育ノ欠点ヲ補フモノトス」（明石女子師範学校附属幼稚園規定第一条、明治四十二年）とおさえ、この目的のもとに「保育ノ方針」を「㈠幼児ヲシテ健全ナル身体ノ発育ヲ遂ゲシムルコト ㈡幼児ノ心情ヲ涵養シ且ツ善良ナル習慣ヲ得シムルコト ㈢以上ノ目的ヲ充分ニ達セシメ心身ノ完全ナル発達ヲ計リ以テ家庭教育ヲ補ヒ併セテ完全ナル学校教育ヲ受クルニ適当ナラシメントス」と三項目にまとめてありました。現実の幼稚園生活は、保育事項――会集・園芸・旅行・遊嬉・談話・手技・唱歌・観察・整理――と、生活に由る保育――服装・食事――の細目にわかれて指導されていました。

このように項目別の骨組だけをかかげますと、なんだか味気ない幼稚園生活だったかのように想像されますが、実際はそうではありません。そのことは『保育日誌』によって十分に証明されています。子どもたちが実に明るくのびのびと、しかも保母の細心な配慮をうけて生活しているのです。子どもにとってはたのしく、教師にとっては意義のある幼稚園生活を準備するための努力がなされていたのです。保育内容の選択にさいしては、つねに子どもの心理的身体的条件を尊重し、教育のねらいと内容・方法を検討し、さらに環境的条件を加味して、選ばれ実施されています。そのような論理的問いつめの周到さと、内容・方法の一貫性とは、そのころの幼稚園教育の理論と実践にとって、他に類例のないものであったと思われます。

そのころの幼稚園は、一般に初期いらいのフレーベル的方法がしだいにくずれ、明治三十二年の『幼稚園保育及設備規定』のあとは、保育四項目がほぼ踏襲されている状況でした。初等教育界では、明治三十八、九年ごろより谷本富の新教育が論争をよびおこしていましたが、保育界では、明治三十四年いらい東基吉が雑誌『婦人と子ども』をとおして、フレーベル的幼稚園を改革するようによびかけてはいたものの、現実には東クメらの創作的な幼稚園唱歌による技術的改革が進行していたにすぎず、幼稚園教育理論にたいする根本的な問いつめが必要であったにもかかわらず、いまだ試みの段階にすぎなかったのです。そうした一般的状況を考えあわせると、明治後期における及川平治の幼稚園保育理論とその実践は、既存の幼稚園教育への批判と、新しい幼稚園理論の追究をねらいとした一種の幼稚園文化革命であった、といえるかもしれません。

動的教育論について

明治期において「為さしむる主義による教育」を数年間実践した結果、及川平治は、大正元年に『分団式動的教育法』を、大正四年に『分団式各科動的教育法』を出版しました。これらの書物は全国の教育関係者にひろくよまれて、明石附属小学校は、大正期新教育運動の先駆的実践校として、全国から参観者をあつめるようになりました。動的教育論の確立とあいまって幼稚園教育理論も、いままでのやや試論的な手さぐりの段階から、さらにすすんだ理論的確立と、それにそった充実した実践へと、自信をもって前進してゆくようになります。そこで、幼稚園教育にはいるまえに、及川平治の動的教育論の核心について、すこし述べておきましょう。

動的教育論とは、二十世紀初頭のアメリカで展開された進歩的教育運動のながれに位置する新教育運動です。その中核は、デューイ教育学でした。デューイの教育思想は、ふるくさかのぼれば、ルソー、ペスタロッチ、フレーベルなどのながれにむすびついています。ルソーは、その著『エミール』で、いままでの旧き教育が子どもを机にしばりつけ教科書をあてがって、いつくるかわからない遠い未来のために、ＡＢＣやその他の知識を注入的に教えこんだことに反対して、子どもの現実の生活の必要からおこってくる学習の動機を重んじ、子どもの興味や関心を尊重しつつ、日常生活の経験のなかで、ダイナミックな活動をとおして学習すべきことを主張しました。動的教育論の大綱は、この精神に依拠しているのです。

及川平治の努力は、従来の静的教育をあらためて動的機能的教育にすること、子どものがわの事情を重んずること、真理そのものをあたえるよりも真理の探究法を授けること、を主張し

ました。及川平治は、従来のヘルバルト派教育学の教材論とはちがった学習材料論――題材論を構築します。児童中心の立場にたって、子どもの衝動を手がかりとしながら、それに水路をつけ、規正善導しつつ教育の理想に近づけようとします。既成の教材を教えるのではなく、子どもの直接経験や作業をとおして、為すことによって学ばせるのです。

動的教育は、必然的に分団式（グループ）教育法をどらざるをえなくなります。分団式教育法というのは、子どもの能力に応じて題材にとりくむそれぞれの地位に子どもをおき、能力に応じてそれぞれ努力させ、補導することを意味します。ここでは、画一的な教師中心の知的注入主義を否定して、子どもは必要に応じて小さいグループをつくり、それぞれの能力に応じて創意を発しながら、自力構造――自学するのです。

さきほどあげた二冊の書物には、分団式動的教育の理論と実際の指導が、くわしく論理的に展開されています。それまでのわが国の新教育が、谷本富による思想の紹介にすぎませんでしたから、明石附属の実践によってうらづけされた動的教育論は身近な新教育として熱狂的にうけいれられ、大正期新教育運動の火つけ役となったのでした。

科学化への努力

大正期における及川平治は、保育目的としてかかげた三か条については従来どおりの考え方をしていますが、しかし、保育内容や方法の理論的根拠をあきらかにするために、できるかぎり科学的方法をとりいれようと努力しています。科学性への探究はすでに初期のころからも試みられていたもので、これは、及川平治の実証主義的な思考方法の特徴をなしています。さきの『保育方針並ニ幼稚園内規』も、総体的にはひとつひとつの事業認識のうえにたって、ちみつに論理構成されながら書きすすめられています。具体的な事例としては「保育ノ効果測定」という項のなかで、くわしい身体検査と個性調査の実施、そしてその結果を保育にいかに利用してゆくかについて指示しています。ひとりひとりの子どもに個性観察簿を用意し、その特徴を記入するようにすすめており、そのさいに記入のしかたがまちまちにならないように、身体・動作・性質・言語・好み・習癖にわたって、「個性観察簿記入標準」まで用意されています。

大正期になってつくられた『幼稚園経営』によれば、科学性への探究はさらに前進し、幼稚園教育の第一目標である「心身ノ健全ナル発達」のためには「保健カリキュラムスケール」をつくって実施し、第二目標「善良ナル性情ノ涵養」には「習慣態度ノカリキュラムスケール」を、第三目標「家庭教育ノ補充」

のためには「家庭状況調査」を考案しています。その他、幼児の知能検査・身体検査はもとより、衛生的習慣の測定・習慣態度の測定もおこなわれ、郷土の実情調査とあいまって、これらをカリキュラム作成と指導に生かす努力がなされています。

保育効果の測定としては、観察法が用いられます。『幼稚園経営』にはつぎのように記されています。

「測定トシテノ観察ニハ

1、カリキュラム資料蒐集観察

2、教育効果ヲ測定スル観察トアリ

ココニハ測定トシテノ観察ヲ意味ス

観察ハ唯見ルコトニアッテ、科学的観察ハ教育測定学ノ示ストコロニ従フベシ

幼児ノ行為ハ三品等ニヨル

測定の結果ハ別ニ定ムルトコロノ幼児ノ生活記録ニ記入スベシ

生活記録ノ形式記入法ハ別紙ノ通リトス」

このようにして、できるだけ科学的な方法によって子どもを観察してその気質を理解し、それにたいする教育の要点と、もっとも適当なあそびがくふうされて、つぎのような表が試作されたりしています。

児童ノ気質ト玩具

気質	教育ノ要点	玩具
実行力に乏しき子供	一、興味を刺激する事 二、克己力を養ふ事 三、進取の念及び実行力を養ふ事 ◎与ふべき玩具 一、好奇心を養ふ事 二、克己力を養ふ事 三、進取の念及び実行力を養ふ事 四、活発なる運動を要するもの	新シキ玩具ヲ研究シテ変更スベシ 秘密箱　くらべ姿　自動船乗人形 子持ダルマ 二人くらべ　チエノワ　数並べ　竹カエシ　お手玉　輪投げ　チエクラベ 農具　空気銃　軍艦　コマ 源平打球　軍隊道具 凧が　羽子　的付弓矢　桶の縄トビ 玉　児童撃剣用具　オハジキ　剣マリ 打球　とんでこい　ボール等　竹とんぼ　源平

「新シキ玩具ヲ研究シテ変更スベシ」とかいてあるところをみると、この表はおそらくひとつの例として作られたものでしょう。同様の形式で、軽はずみなる子供、忍耐力に乏しき子供、物事に感心せざる子供、強情なる子供、思いやりの心なき子供、考ふる習慣なき子供、についても教育の要点と玩具があげられているのです。

生活と学習の統合への努力

この時期における及川平治のもうひとつの努力は、生活と学習の統合のあり方をいっそう徹底的に追究することにありました。彼は「生活」というものを分析して「生活指導」という概念をみちびき出し、生活指導と保育の様式とは一致すべきものと考えるようになります。しかしながら、つぎの引用でもあきらかなように、まだ統合は果たされておらず、カリキュラムは(1)保育項目に分離せざる生活単位案と、(2)保育項目別単位案との二つを作成すべし、とかかれているのです。

「幼児ガ要求興味ヲ充サムトスル継続活動ヲ幼児ノ生活ト云フ

幼児ノ必要興味ヲ充タスコトニ関スルアラユル事情ヲ生活地位ト云フ

生活地位ニ於テ活動ヲ組織シタルモノヲ生活様式又ハ生活姿態ト云フ

社会ノ生活様式ハ歴史的ニ構成セラル

生活指導ハ必要興味ヲ価値アル方向ニ導クコト、生活様式ノ変化ヲ悟ラシムルコトヲ意味ス

生活指導ト保育ノ様式トハ一致スベキモノトス

幼児ノ生活系列・経験系列ヲカリキュラムト云フ

カリキュラムニハ、(1)保育項目ニ分離セザル生活単位案ト(2)保育項目別単位案トノ二ツヲ作成スベシ

各カリキュラムニハ、幼児ノ代表的活動ト望マシキ思想・感情・行為ノ変化トヲ記載スベシ」

そして、たとえば昼食について、カリキュラムの例があげられています。

	昼食
代表的活動	望マシキ行動ヘノ変化
(1) 手ヲ洗フコト	水道ノ出口ヲ適度ニアケテ洗フコト 水ガ飛散セヌヤウニ洗フコト 洗ヒタル後ハキレイニハンカチデ拭フコト
(2) 食事ノ準備ヲ成スコト	麦茶ヲ配ルマデ順番ヲ静ニ待ツコト 挨拶スルコト 適当ニ食スルコト 小口ニトルコト ヨクカムコト 飯粒ヲコボサヌヤウニ食フコト 口ニ食物ヲ入レテ話ヲセヌコト 他人ノ嚙ミ居ル間ハ話シカケヌコト
(3) 食物ヲ食スルコト	

(4) 食後ノ仕末	清潔ニスル責任 食器ヲ片付ケルコト パン屑ヤ飯粒ヲ拾ヒトルコト コボレタ水ハ拭ヒ去ルコト
(5) 食後ノ会話	面白ク話ヲスルコト 一時ニ一事ヲ話スコト 子供ニ適スル食物ノ種類ヲ学ブコト等

このように、ひとつの指導案ごとに指導目標がはっきりわかるように、のぞましい行動への変化が具体的にあげられています。

「生活指導ノカリキュラム生活単位案」の作成は、単位選択の基準にもとづいて単位をえらび、これを単位組織の原理によって組織します。そうしたカリキュラム構成は、カリキュラム構成学の示す順序にしたがって合理的につくられるのです。このような手つづきでみちびきだされた生活単位として、つぎのような例があげられています。

「買物ゴッコ　自動車遊（電車遊）　汽車遊　飛行機　郵便ゴッコ　電信遊　八百屋遊　玩具屋遊　文房具屋　菓子屋　人形遊　ママゴト　農夫遊　家作リ　誕生日祝　水遊　祝祭日　正月遊　消防遊　巡査ゴッコ　オ雛祭　端午節句　七夕祭　オ月見　家族ノ食事遊　家族娯楽　衛生的事項ノ劇化　蒐集遊（木実・木葉・貝殻・石塊）　近郊見学　神社参拝　園芸（細案ヲ要ス）　公園（細案ヲ要ス）」

このように活動的な生活単位が計画されたほかに、保育項目別単位案も計画されていました。その例をあげておきましょう。

『園芸及動物飼育ノカリキュラム』

亀　金魚　鮒　鯉　小鳥

四月　朝顔ノ種蒔（児童ノ活動…望マシキ活動ヘノ変化）

五月　コスモスノ種蒔（　〃　）

六月　田植（種蒔）（　〃　）

菊ノ移植　朝顔ノ手入レ　養蚕　オ玉ジャクシ

七月　朝顔ノ手入レ　絹糸草　金魚　メダカ　箱庭

九月　大根蒔　園庭ノ手入レ　キリギリス　藤豆トリ　コホロギ

十月　菊ノ手入レ　春咲ノ花ノ種蒔　木ノ実拾（ドングリ）

十一月　米ノ収穫　菊ノ手入レ　麦蒔

十二月　豌豆蒔　園庭ノ手入レ

一　月　畠ノ手入レ

二　月　麦ノ手入レ

三　月　種蒔草花ノ種蒔　ハゲイトウ　コスモス　カンナ

『近郊利用ノカリキュラム』

詳細ナルカリキュラムヲ別ニ作成スベシ

公園
- 公園内ノ設備
- 設備ノ正シキ利用
- 動物ノ観察
- 樹木草花ノ四季ノ変化　菊花展覧会
- 公園内ノ池

海岸及遊園地
- 潮ノ満干　船舶ノ航行　港ノ観察
- 夏季海水浴　売店ト季節ノ変化
- 忠魂碑　設備利用
- 生魚池　魚類　海草

人丸山ノ方面
- 神社　売店　花見
- 丘陵　坂路　月照寺
- 境内ノ設備

権現山ノ方面
- 山ト平地　田　畑
- 草狩

上ノ丸方面
- 田園ノ植物　農家ノ生活
- 牧場　苺狩

市内見学
- 重ナル建物　道路　鉄道　電車通
- 停車場　停留場　神社参拝
- 各種工場　商店装飾　商店種類

舞子方面＝徒歩ノ心得　公園ノ設備

須磨方面
- 動物園　花見
- 汽車旅行ノ心得
- 離宮　寺　売店

望海浜方面＝運動・遊戯ノ場所

農事試験場方面＝試作ノ植物

水産試験場方面＝各種ノ試験・水産物ノ加工過程

これらはいずれも年間の活動の骨子だけしかあげていませんから、これをもとにして、もっとくわしい計画がつくられていくのです。そして、一日のプログラムはおよそつぎのようにすすめられました。

『一日ノプログラム』

一、集会

1、朝礼　朝ノウタ

2、見聞事項ノ自由発表

3、偶発事項ノ指導

4、相互ノ注意
ハンカチヲ忘レナイカ
鼻紙ヲ忘レナイカ
月謝を忘レナイカ（毎月五日）
5、保姆ノ話　其ノ日ノ注意
6、行進遊戯
二、其ノ日ノ保育カリキュラム
1、其ノ日ノ保育事項ハ環境ト児童ノ興味トニ由テ決定ス
2、雨天時ノプログラムト晴天時ノプログラムトヲ区別シテ立案スルコト
三、遊戯室開誘室廊下園庭ノ整理

いままで、資料を追って、明石附属幼稚園における大正期の保育を概観してきました。この時期の保育は、初期のそれと制度的にはほぼ同じ規定のもとに保育方針と保育項目（『幼稚園経営』では保育項目ということばがつかわれています）をかかげ、カリキュラムは、(1)保育項目ニ分離セザル生活単位案と、(2)保育項目別生活単位案との二つにわかれているのですが、保育実践の具体的内容からみると、いわゆる保育四項目の影がきわめてうすくなっていることに気付きます。保育項目別カリキュラムにおいてとくに顧慮されているのは、「園芸及飼育ノカリキュラム、近郊利用ノカリキュラム、設備ヲ利用シタルカリキュラム」です。保育実践にうつしたばあいを想定しますと、これらのカリキュラムは、生活単位そのものになってしまうように考えられます。実践上では、すでに、保育項目のうちの多くが、より大きい概念としての生活単位に吸収されつつある事実がみうけられます。いわば、制度としての細分化された保育項目と、総合化された保育実践とのあいだに、矛盾がめだちはじめます。保育実践が総合化したのなら、細分化された制度は実情にあわないものでしかありません。古き皮袋は、改められなければなりません。制度としての細分化された保育項目を理論的に改変して、統合化された保育実践にマッチさせる必要がおこってきています。このような理由から、やがてもう一歩前進した立場から、指導理論が改革されていきます。これについては、つぎにふれようと思います。

この時期の及川平治は、動的教育学の理論の確立とあいまって、明治後期からつみあげてきた幼稚園保育を、さらに理論的・実践的に充実させました。保育の科学化への努力、生活と学習の統合への努力、そして後者における実践上の飛躍は、いまやさらに新しい理論を必要とするにいたりました。その新しい理論をつくりあげる努力を、及川平治はさらにすすめていくのです。

（和光大学）

幼年期について

勝部真長

はじめに

私自身の幼年期を思いおこしてみても、小学校に来ている子どもを見ていましても、どうも幼年期というものが、私にはわからないのです。

一、テレビの子どもに与える影響

現在テレビがこのように発達しまして、長い時間テレビを見る集中力はないが、断片的にテレビを見ていることからくる影響が今の子どもに現われていると思います。特に最近の子どもたちの中で、それはまずことばに反映しています。意外なことばを知っているということです。ボキャブラリーが豊富です。しかしそれはまとまりのあるボキャブラリーでなくでたらめな豊富さです。ことばというものがテレビの持っている映像文化のイメージと結びついているので、場面としては幼児も何となくわかるのではないかと観察していて考えられます。

たとえば、小さい子が「あ、かがてんらくした」と言います。転落なんてことばをどうして知っているのかと思うと、もっぱらテレビの中で落ちてくるところを転落と言っているのを覚えたようです。「裏切られた」などということを真剣な顔をして言っていますが、それは裏切りということを場面として理解しているという形です。子どもの中にかなり情緒というものがモザイクのように無秩序な形ではいりこんでいます。いろいろな情緒が子どもの中に吸収されつつあるということが、いわゆる情報革命と言われるテレビの時代に育った子どもの、ひとつの特徴のように現われているのではないかと思います。

二、幼年期の長さが持つ意味

しかし、これよりも、いつも言われることですが、人間において幼年期が長いということの方が問題であります。ということは、生まれてすぐには何の役にもたたないきわめて無力な、そして保護を必要とする存在であるという事実です。動物はほとんど生まれてすぐ自分で用がたせます。犬や猫でも半日か、二、三日もすれば自分で動き、えさを探すことも可能です。フライキャッチャーという鳥は、生まれるとすぐ目の前のはえをつかまえて食べると言います。生まれてすぐ自分でえさをつかまえる能力を持っているということに比べると、サルとか人間の子どもは何にもなりません。この使い物にならない赤ん坊、しかも一番てまひまがかからなければものにならないというのは、何を意味するか、というのがここでの第一の問題です。

人間の子はおかあさんのおなかの中から出てきた時は未完成で機械にたとえるとまだ半分しか組み立てができていない製品です。そして出てきてからまだてまひまかけて組み立てないと動きださない、というはんぱな状態で生まれてきます。他の動物はほとんど完成品として出てきて動き出す、というのに比べて人間の子ははんぱ製品であるというのは、きわめて複雑なしくみだからだと説明ができます。人間の体や心はてまひまかけなければ自動的に動けない複雑きわまりないものであり、何がそんなに複雑なのかというと結局心だと思います。心というのは医学的に申しますと、脳と神経組織から成り立っていて、その成熟にてまがかかるのです。脳と神経組織の調節ができるまでの保護が必要なのです。

子どもが歩こうとする時、物を言おうとする時、何かを覚えようとする時のエネルギーの集中は大変なものです。

脳と神経組織が複雑なのでそれを十分なものに整えるまでに大変な期間を必要とします。ところがこの準備期間（幼年期）が長いということが、実は人間社会の基本的なあり方を決定しているのではないでしょうか。母が目を離せないということが起こってきます。犬や猫は親がすぐ目をはなせます。ですから、動物の世界では、子どもがどこかにまぎれて自分の子どもであることがわからなくなるぐらいに大きくなって、どこかで一人前の成犬、成猫となって生活し、親と子の近親相姦の関係もおこなわれます。

三、人間固有の家族形態と幼年期

人間の場合でも、もし、子どもがはやく一人前になって、親の手もとを離れてどこかに行ってしまったとしたら、人間の生活のあり方はよほど変わっていたと思います。まず家族というものがあったかなかったかわからなくなり、それはちょうど動物の世

界に家族があるかないかわからないのと同じですね。人間が営んでいるようなはっきりした形の family ―家族生活―というものは、子どもが一人前になるまでにきわめてててまひまがかかるということがあるから起こったのではないかと思います。子どもが、もし、すぐ手を離せる、親のそれほどの保護を必要としないということがわかれば、夫婦というものがこれほど固く結びついていることが可能かどうか―。おそらく子どもを育てるのに十年、二十年必要だということから夫婦は長くいっしょにいますし、いっしょにいれば当然そこに親密な結びつきというものがあって、離れがたくなるという今の家族の構成というものが気持の上ででてくると思うのです。しかし、子どもに対する責任がなくなればかなり男女は自由になり解放されると考えられませんか。

子どもへの責任というものを抜きにして考えた場合には、今よりももっと離婚というものが起こりうるでしょうし、男女はかなり解放されて自由に新しい生活をきりひらくチャンスがでてくるのではないでしょうか。ということは、そもそも家族というものが今あるような形で固定したものではなくなると思うからです。

今のように家族が固定した永続的なものとしてあるのは、やはり子どもの長期にわたっての養育というものが中心にあるからだと思います。子どもがいつまでも手がかかって、それをかかえていなければならないということから、実は親子の感情がきわめて深いものになり、そこから人間関係というものが深みをおびてくるということが起こってきているのではないでしょうか。だから出発点から子どもが動物と同じようにはやく一人前になってどこかに行ってしまうという前提にたって考えると、社会の構造ががらりと変わってしまうのではないか、と私は想像します。こういうふうに現在の家族というものがつくられる前提には、幼年期の長さ、子どもがいつまでもてまひまがかかるということがあり、そこからひとつの人間らしい道徳性がうまれてきます。親子の中に切っても切れない深い感情が生まれてくるのです。

実際夫婦はいつまでも他人だが、子どもが生まれるとその子どもを媒介にして親類になります。おまえは子どもの母親であり自分は子どもの父親である。したがって父と母という関係において親類なのです。血のつながりはぜんぜんないのですから、つながりがあるとすれば子どもの中に父の血と母の血がまじっているという関係で、子どもから逆に規定されて、切っても切れない血縁というものが出てきます。まったく子どもがなければ夫婦は赤の他人、平行線ということです。しかもその子どもが血縁だけならば動物の世界を考えてみるとたいしたことはないが、そこに家族生活という感情的なものがプラスされることによって、われわれは根本的にちがったものとつくりかえられてしまいます。そして、その根本は愛と憎しみの感情だと思います。

四、心情のできあがる過程

非常に小さい時から子どもは愛と憎しみがわかるようになっているのではないかと思います。

① 快・不快の原理

子どもを観察してみますと最初にあるのはいうまでもなく快、不快の感覚です。たとえば皮膚が非常に気持いい、くすぐったい、首すじなど特にくすぐったくてキャーキャー言って叫びますが、ああいう快、不快の感覚は実に敏感に全身にばらまかれているのだと思います。

その快、不快の感覚で子どもは行動しています。快なるものを求め、不快なものはさける。これは子どもに限らずおとなにも共通な行動のよりどころとなっていますが、ただおとなは目前の不快はがまんしても永続の快楽を求めます。たとえば歯が痛い時、歯医者にいってガリガリやられるのは不愉快でありますが、虫歯をいつまでもほっておくというのは良くないことがわかっていますから、一時の不愉快はがまんしても永続的な安心、快楽を求めるというのがおとなの快楽計算であります。それが子どもの時はのみこめないので騒ぐのですが、次第に子どもも快なるものを求める時に親なりまわりのものがしつけをするわけです。良いことをすればいい気持にさせ、悪いことをすればおしりをたたく。良いことをすればほめてもらえる、おかしをもらえるというように良いことと快楽とが結びつき、悪いことと不快なこと、痛いことが結びつき、快、不快の原理が同時に賞罰の原理、それをほめられることとしかられること、つまり人の社会において認められることと認められないことに分かれてくるということが幼児期に感覚を通してわかってくるのです。

これがしつけの第一段階だと思いますが、この快、不快の原理で最も動いている時に、そこに善悪の原理というものが子ども心に結びついてくるということが人間が人間になる第一段階だと思います。最近ここのところで手をぬく親が多いようです。はっきりと感覚を通して良いことと悪いことをしつけておくということに手をぬいてしまう、漠然としかやっていない親が多いのではないでしょうか。

その証拠に中学生か高校生ぐらいになって悪いこと、いわゆる非行をして、調べてみますと良い悪いの区別がわかっていない青少年が多いのです。たとえば線路に何か物をおいて電車が来てぶつかるのを見ている。電車が事故をおこすのが、急停車するのがおもしろくてしかたがないと見ている。ただおもしろいから、痛快だから、つまり快、不快の原則が子どもの時のまま残っていて、そこに善悪の原理がはっきり結びついていない青少年が

非常にふえてきています。善悪の判断がきわめてあいまいでぼやけている、ということは、どうも幼児の段階で親たちが良い悪いのけじめをはっきりさせていなかったとしか考えられないのですが、いずれにせよ幼児期の特色が快、不快の原理で動くということは、その後の成長に非常に影響を及ぼすと思います。

② 情緒から心情へ

第二に情緒(emotion)でありますが、特に情緒と心情を区別して考えると幼年期の意味がはっきりすると思います。情緒というのは一時的な心の経験、つまり怒るとか喜ぶとか笑うとか、その場その場の心の動きが情緒であります。その時の気分です。これに対して心情(sentiment)は永続性のある長続きのする心の状態をいいます。それは愛情とか憎しみとか嫌悪とか好きとか…趣味も心情につながっているのだと思います。非常に深い、その人の personality—人柄—というものにかなり中心的な要素が心情といわれるものであり、同時にその人の趣味となるところの基本的なものだろうと思います。

幼児期の特色は情緒的なものがだんだん深まってその子の心情にまでなることにあります。情緒から心情への深まりのぐあいがその後のその子の人柄を約束するのではないでしょうか。たとえて申しますと、心というものを水にたとえますと浅瀬でさらさらと流れている状態が情緒だと思います。浅いところでピチャピチャ波だって年中流れている。今泣いたカラスがもう笑っている、と申しますが、子どもは泣いても「さ、もう泣くのやめて」とおかしをだすとピタッとやむ。目に涙をためながらおかしを握って笑い顔になっている、というふうに心が浅いのです。浅瀬で波だっているから絶えずピチャピチャしているけれども、泣いたと思ったら笑う、笑ったと思ったら怒る、というように絶えず流動的です。こだわっていない、流れている。その点子どもは無邪気といわれます。おとなでもいますね。実に無邪気で、今泣いたと思うともう笑う。このあいだまでおこっていて人にプンプンしていてもどうぞこれひとつ、とつけとどけするとにこにこして手のひらをかえしたように態度がかわる、というきわめて単純なかわいい女といわれる人がいます。それは心が浅瀬で、こだわるところがなくきわめてつきあいやすいわけです。

③ 愛と憎しみの感情

しかしほんとうのおとなというのはそうはいかないので、心に深いところがあります。つまり淵というか、川の曲がり角で深いところがあるのです。水の面は鏡のように静かで波ひとつたっていないのに、奥にいくと深く流れていてその渦に足をとられるとおぼれて死んでしまう、というところがよく長瀞とか、川の流れ

の途中にあります。つまり表面はしーんとして何ら変化を示しませんが、心の奥深くに渦をまいている。愛の渦、憎しみの渦、これは深いものです。ですからたとえば親の愛情というものが、子どもがいろいろな悪態を申しましてもあまり問題にしないのは、心の奥深くで愛しているのです。表面的に波だってバシャバシャ激しいやりとりをしましても心の奥では深く愛しているのです。

あるいは、男女の間でも深い愛情というのはそういうものですね。表面的にはあんなになぐられたり髪をひっぱられてもなんでおとなしくついているのだろう、なんてよけいなお世話で、本人どうしはもっと深いものでつながっていて他人にはわからないものです。夫婦げんかは犬もくわないというのは、そこのところなのです。そのかわり、表面知らん顔をしていても憎しみを持っている人がいますね。深い憎しみをたたえていて表面的には顔にだしていませんけど、心の底では嫌い憎んでいるという人がいます。その深い底に定着したのが、その人の personality の一番大事なものであって、そしてそれは趣味につながっていると思います。

④ 趣　味

趣味を聞くということは、たとえば入学試験とか就職試験なんかに趣味を聞くのは非常に意味があります。なんでもないことですが、その人の心情を聞いているのです。その人の心の奥底は何に一番ひかれているか、はからずも趣味でわかります。趣味を聞くということはこわいことです。もしほんとうにその人が答えるならば、ただ、あたりさわりなく趣味は読書と散歩と音楽です。なんて言っているぶんにはわかりませんけど、正直にパチンコとマージャンとかけです。なんて答えるとだいたい人柄が知れますね。それから色彩、色を聞くということもかなり趣味につながりがあると思います。どんな色を好むか、どんな色を着ているか、ということはその人の personality を表わすのではないかと思います。

特に女性は、いやなものは着ないでしょうから、着ている以上はやはりその人の趣味だと思うのですね。だからこう見わたして、「ははあ欲求不満が相当強いな」「そうとうやきもちやきだな」とかいうことを全身で表わして歩いているのだと思います。そこでユニホームというものはそういうものを出さないで、無難な色に変えて内面をおしつつむということになるわけです。そういうふうに心情というものができあがるまでが、幼児期というものが形成過程として、少年少女期、あるいは青年期にかけてその人の人格の土台の時期ではないかと考えます。

五、心について

心というものは、さっきいいましたように、脳と全身にはりめぐらされている神経組織（系統）の働きだと考えた方がいいだろうと思いますが、しかしわれわれは脳と神経組織だなんていったのではピンとこないで、むしろ心とか精神とかいった方が親しみやすいので心というのですが、その心を分解すると意識と無意識にわけることができます。

① 意識と無意識の領域

つまりわれわれがふつう心と言っている部分には、意識している部分と無意識の部分があると思います。意識は気がついている状態、無意識は気がつかない状態、たとえば夜眠っている時は無意識状態です。無我夢中ってやつです。この無意識の中でポカッと意識が水の中の油のように浮いているのが夢です。だから夢というのは意識なのです。けれども無意識の中にポカッと浮かんでいるものだから、朝目がさめると思い出そうとしても思い出せない。夢の続きが知りたいと思ってもなかなか続きがでてこないで苦しむのですが……。この夢はまた、その人の無意識が押し出したものですから何かその人の願い、願望というものがでてきているのだろうと思います。

しかし、夢を見ないで熟睡している時は無意識そのままです。ところが朝起きると意識がよみがえってきます。みなさん、朝めがさめて手を握りますね。きちっと力がはいって握れますか。つまり意識するほど握れるわけで、無意識状態の時は手がしっかりと握れないのです。朝めがさめた時に握力がちゃんともどっていれば意識のもどり方がはやい、健康だという証拠です。これがなかなか握れない。力がはいらないというのは、やっぱり血のめぐりが悪いので無意識から意識の転換がおそいのです。

しかし意識がよみがえってくれば、「ああ、きょうは曇りか」「きょうはお茶大の講習会か、やれやれ」とかいうことを考えます。現在、私は意識してみなさんにお話ししていますし、みなさんもおそらく意識して聞いていてくださるのだろうと思います。中には無意識の方もいらっしゃるかも知れません。その私の意識の下に無意識の部分がずっとひろがっているのです。ちょうど三角形の氷山の一角ということができます。氷山というのは海面の中に三角形に浮いていて、そのほとんど八倍ぐらいが海面下に沈んでいます。船が氷山にぶつかるとこわいのは、この下の所にぐさっとささって動きがとれなくなるのです。人間の心も意識の部分というのは心のごく一部だといわれます。あと八倍ぐらいの深さで無意識の層がずっと沈んでいます。

② 意識行動と無意識行動

人間を行動にかりたてるものは、意識からくる部分と無意識か

らくる部分とがあります。われわれは意識してこうしようと思ってする行動があります。今みなさんがここにいらっしゃったのは、意識して、会費をはらったのだから行かなければならない、というお考えでちゃんといらっしゃったのだと思いますが、ところが無意識でフラフラといく場合があります。停年で退職した人はさびしいらしいのですね。朝起きてなにげなくまた元勤めていた学校へのこのこやってきた人があります。「あ、もう四月から自分は停年でやめたんだ」と、来てみてからあわててひきかえした、という話を聞きますが、それは条件反射みたいにくせになっているとも言えますが、無意識の中で、人間はやはりじっとしていられない、出ていって働きたい、という欲求があるのでしょうか。

あるいは恋をしている時に、無意識のうちにきょうは会う予定ではないのにフラフラと恋人のいる方向に電車をのりかえたりしているということがあるそうですけれど、とにかくわれわれは無意識の中で行動することがしばしばあります。実は意識して行動していながら、それをささえているのは無意識の行動であり、無意識の願望である、という場合もあります。

③ 自我感情の形成

この意識というものの中心に実は自我感情があると思います。我というものが中心で意識というものはまとまりがついていると思うのですが、幼児期の特色はその自我感情がどういうふうに育ってくるかということにもあります。これは国によって多少違うと思うのですが、日本の子どもの自我感情はどういうふうにして形成されるのでしょうか。

アメリカの社会学者でミードという人が書いた本に自我感情の形成過程があります。つまりアメリカの子どもでありますが、I私という感情は最初からはないというのです。むしろ最初にあるのは、me私に、とか私を、というふうに受身で自分を受けとっている。僕をいじめたとか、僕に石ぶつけたとか、受身で自分を感じるのが最初にでてくる段階で、それからその次にmy私のという所有格で発想します。みち子ちゃんのお人形、より子ちゃんのおべべ、おくつ、なんていうふうに所有格ですね。常に自分のものを並べる、自分の物を集める、それは必要な段階でしょうけれど、そこに自分を投影する。

そしてみち子ちゃんのお人形とか、みち子ちゃんの絵本とかを見ているうちに、みち子ちゃんなるものがはじめて透視されてきます。そして、I私が、みち子ちゃんが、自分が、という自我感情が高まってくるのです。つまり、自我意識の成熟ということ、これが人間形成において大事な問題でありますが、この自我感情が意識、無意識を通じていちばんしめくくりになる中心の感情だと思います。つまり、子どもにとって大事なことは自我感情がゆが

められていない、ということです。

今、言いましたように、いつも受身的に自分がいじめられている、被害をこうむっているというような被害者意識、日本民族というのはかなりこの被害者意識が強いと思うのです。常に何か占領されているとか、あるいは敗けたことがひびいているのでしょうか、いまだに何かされているというような受身的発想しかできない時があります。もっと自主的に日本がこうするんだ、というふうに立ち直るといいと思いますが、非常に受身的なところはまた、幼児心理が日本人には強いのではないかと思う節があります。それはそれとして自己を大切にする、自分を粗末にしない感情が子どもの中に育ってき、ある意味の主体性、自主性というものが正しく育つことのくふうが常に施されていなければならないと思います。

④　生と死の意識

特に子どもを見て、観察して感じられますのは、死、ということが何歳ごろからわかるか、ということですね。「パパなんか死んじまえばいいんだ」「ママも死んじゃえばいい、僕は家出するんだ」なんて勇ましく出ていくのがありますが—すぐ帰ってきますが—五つぐらいでも自殺すると言っている子がいます。目薬飲んで自殺しちゃうから、なんて言っているのですね。どこまで本気で死がわかっているか、ということが私にも疑問なんでありまして、幼児期における死の意識とか死についての感覚、これが知りたいと思います。

とにかく人間には生の本能と死の本能があります。つまり人間は誰でも生きたいと思う。殺すぞといわれれば逃げようとする。これはもう本能的に人間が持っている生きようとする意識であります。けれども同時に死の本能がある。死にたいという気持は誰の心にもあるはずなのです。それは健康な時にはありません。危険なのは疲れた時、心身ともに疲労困憊した時、くたくたになった時です。

たとえば受験勉強で浪人を何年もして絶望的な状態にあり、毎晩徹夜の勉強で神経衰弱になっている受験生がふと思いついて死んでしまう。いつでしたか、お茶の水女子大学の歴史の四年生が卒業論文を持って中央線に飛びこんで死んだことがあります。良くできる学生でしたが、非常に完ぺきなものを作りたいと願っていたのですね。それで当然もう卒論として通るくらいのいいものを書いているくせに、まだ自分がそれが足りないと思って、骨身をけずって大きなテーマをかかえて苦労し、最終提出日の前の晩に、もう間にあわない。そこで、ふらふらと自分の家を出て、中央線に飛びこんで死んだことがあります。そういう疲労困憊し、疲れきった時に人間は死の誘惑に襲われるのであります。

中小企業の経営者が、年の暮れになりましてボーナスを出すことができない、金ぐりがつかない。工場を閉鎖しなければならない。おおぜいの家族をかかえている。そういう時に金策にかけまわって夜も寝ないでそろばんをはじいてとびまわっているのに金ぐりがつかない。もう心身ともに疲労困憊している。そんな時省線のプラットホームに立って、雨がしょぼしょぼ降っていて、ゴーッと電車がはいってきますと、ふっとひきずりこまれるような気持で前に飛びこんでしまうのですね。だから町を走ってくるバスとか大型トラックのヘッドライトを避けることをしないで、ひきずりこまれるようにひきこまれていくという感じがする、というのが疲れきった時の異常な感覚らしいです。それを日本では昔から死神にとりつかれる、といいます。

フロイトという精神分析者は、death-desire—死の願望—と申しましたが、人間は生きようとする願い、いつまでも生きたいという健康な願いと同時に、不健康な願いとして死にたい、いっそ死んでしまった方が楽だという、死への誘惑というものを誰しもが潜在的に持っています。そこで自殺ということが常におこるのですね。日本は自殺の多い国です。スウェーデンも自殺が多いそうですし、スイスもかなりあるそうです。社会保障が進んで生活は困らないのに人間は死ぬことがあるのですね。それは気持の上で疲れた時、不健康ですけど、ノーマルでありませんけど、事実において人は死にたがるのです。

日本で心中ということがありますね。親子心中、一家心中、あるいは男女の心中、この心中というのは、実にわけのわからないものですけれども、おそらくキリスト教の側からは無意味なことだと思います。つまり男女はたとえいっしょに死んだってあの世で結ばれるとは限らないのですが、仏教の考え方からするとこれは意味があるのですね。仏教では夫婦は二世といいます。親子は一世、夫婦は二世、主従は三世、つまり親子はこの世かぎりのつきあいですが、男女の仲はあの世とこの世、another-life においても結ばれている、という二重の life において縁が深いのです。主従—主人とけらい、あるいは先生と弟子—の仲は三世、三代にわたって、過去、現在、未来にわたって縁がつながっているというふうに解釈してきたのが、徳川時代の仏教の解釈です。ですから、元禄時代、近松門左衛門が戯曲を書いたころは、心中物がたくさん喜ばれて上演されました。この心中の考え方はこの世でいっしょになれない、仲を裂かれている男女は、二人でいっしょにはやく死ぬことによって、あの世に生まれ変わってこんどは天下晴れて夫婦になろう、という考えなのですね。この考えにとりつかれていますから、死ぬことがむしろ喜ばしかったのでしょう。

そういうふうに日本では男女は心中というものを考えていて、

それはひとつの慰め、この世の苦痛に対する慰めとなっているのですが、死にたがる気持というのは、人間の中に根づよくあるようです。

子どもでもすでに小学校の一、二年で自殺した例があります。私自身も、たしか小学校の一年の時、首をくくった経験があります。あれどういうつもりで首をくくったかわかりませんが、昔かやのつり手というのがあって、それに首をくくって台から飛びおりたことがあります。その時、つり手がくさりかけていて切れて、私は助かったのですが、あれがじょうぶであったら死んでいたかもしれないのです。その後長い間首にすり傷が残って、汗がしみると痛くて困ったことがありました。確かに私はその時死のうと思ったので、死に対する願望は幼児期にもあるのではないかと思います。

⑤ 向上と堕落

とにかく、生の本能と死の本能があり、これが日常生活で現われる時は向上心と堕落願望となってあらわれます。つまり人間は生きている限りより良く生きよう、better に生きようと思いますが、それが向上心です。常に良くなろうとする、実際にはそうもいきませんけれど、やはり年の暮れが近づくと日記を買いこんできて来年は日記をつけようと思います。いざつけはじめると三月頃から白紙になって、もう六月ともなれば連続白紙でつけておりませんけど、それでもまた年の暮れがくると来年こそは、と思って日記を買いこむというのは、やはり向上心の現われだと思います。

その反面堕落願望というのがございまして、人間はやはり、落ちたい、堕落したいという誘惑にひきずられることがあります。もう十年ぐらい前の話ですが、幼稚園の先生をしていた方で、園長さんとけんかしたのですね。そのうちがまんがならないことがあって、どうしてもやめる、やめていっそ自分は傷だらけの女になってみたい、だからバーにつとめたくてしようがない、と相談に来た人がありましたが、そしてとめても聞かずにとうとうやめてバーの女になった人がいました。一変して堕落してみたのですね。そういう堕落への願望というものがあるらしいのです。中学生の女の子でも池袋あたりで話していますよ。「私、堕落しちゃおうかしら」「ズベ公になっちゃおうかしら」なんて。先生に叱られ、親にも叱られ、気持の上でもう行き場がないと、いっそ堕落しようかという気持になるのです。

⑥ 建設と破壊

それは子どもにはないようですが、子どもに現われるのは破壊本能です。つまり、向上心というのは建設の本能、物を建設して

いきたい、より良く築きあげて行きたいという気持、ところが堕落本能というのは、反面では破壊本能、ぶちこわすことです。もうどうにでもなれ、といなおって、めちゃくちゃにしたいという破壊が外に向かえば、今の全学連のように物をたたきこわすわけです。自分に向かって破壊すれば、傷だらけの女性になってみたいとか自殺したいとか自己破壊になるのです。原理はひとつです。外を破壊するか内を破壊するか…、外を破壊すれば社会に対して攻撃的になります。

この破壊本能が幼児には強いと思われます。子どもを観察していますと、建設よりまず破壊です。よちよち歩いて来て、夕方こしらえたちゃぶ台のお膳をカシャカシャと丹念にこわして満足している。あるいは積み木を積むと、まずこわすことですね。夏になってトンボとかセミに糸をつけて持っていってやると、すぐに羽を破っちゃうのです。実に残虐性にとんでいるのが人間の子どもだろうと思います。この残虐性があるということを知っておいて、そうしてはいけないということを教えてあげなければいけないと思います。万年筆はたたきつぶす、時計をみれば放り投げる、それを万年筆はこうやって書くもの、時計はこうやって見るもの、と教えなくては、教育によらなくては、建設がわからないのです。子どもはほうっておけば破壊的です。ですから幼児期において、破壊ではなく建設を教えること、憎しみではなく愛を教えること、これがどうやったらできるか、ということです。

六、青年期に及ぼす幼年期の影響

今の学生を見ていると、破壊本能だけが発達しているのです。建設はありません。ともかくこわすこと、破壊のための破壊です。何でもこわせばいいと思っているらしい。それは非常に憎しみにあふれています。政府自民党が憎い、学校が憎い、学長が憎い、教授が憎い、権力はすべて憎い、立命館大学の庭にあるわだつみの像も憎い、みんな憎い、だからこわす。これはもう破壊と憎しみの本能だけでつき動かされているとしか思えません。

しかし、憎しみというものは強いものですし、これは必ず破壊につながるものなのです。

北風の物語がありますね。旅人が外套を着て行くのを北風と太陽とどちらが先に脱がすことができるか、という話です。はじめに北風がぴゅうぴゅう寒い風を送っても、旅人はますます外套をかたく着て脱がなかった。太陽がにこにこ笑い出すとさすがの旅人も暑いので外套を脱いだ、という子どものお話は、この愛と憎しみの戦いを端的に表わしています。結局憎しみはいかに強くても人の心を動かさない、やはり愛情が人の心を動かすのです。

今の学生運動はどうしてこの原理がわからないのかと思います。憎しみと破壊の連続の中でどうして人が感激し、心を奮いた

たせることができるのでしょうか。よほど幼年期に何かが欠けていたのではないかという気がします。よほど母親がほうっておいたか、ついてはいたけれども別のところに力をいれたか、ひとつ考えられることは、幼児期にあまりに母親が（父親でもいいのですが）子どもに手を加えすぎ、子どもがほんとうにしたいことをさせてあげなかった場合、子どもがほんとうにしたい遊びはさせずに、子どもがほんとうは嫌なこと、ピアノとかバレーとかそういうレッスンとかあるいは勉強とかを強制してきた場合、子どもの中に深い憎しみが母親に対して植えつけられる、ということは考えられますね。そして母親というものは、すべての規律とか訓練とか、お勉強とか、権威とかの代表です。

だから母に対する憎しみが表面には出ず無意識のうちに蓄積されて青年期に達し、およそ母と同じ代名詞である政府、学校、学長、教授、警察、すべてこういう権威、規律、秩序、訓練、そういうものに対して猛然と反発するということはありうると思います。だから、母親が愛の代名詞でなくて、権威とか秩序とかの代名詞にすりかわったということになれば、そうして育った子どもたちが大学生になって、とたんに火山が爆発するように蓄積された憎しみが、そこに燃えあがるということがありうるのではないかと思います。

さいごに

今の全学連の諸君の幼年期のあり方がどうであったかということをさかのぼって調査することができれば、非常に問題の解明に役立つと思います。

やはり今後の幼児教育というものの中に、もう少し愛と憎しみの原理、建設と破壊、向上と堕落、生と死、などの基本的な願望が無意識の中でどう育っているか、という点を調べることが必要なのではないでしょうか。

つまり意識の面は、リズム遊びとか絵を描くという点でいろいろな指導の内容として重視されていることももちろん大事ですけれど、その前提にある無意識なものから、心情に定着するまでに、はやくこの関係を再検討しなければなりません。そういう曲り角にわが国の教育全体が直面しているように思います。ですから、大学教育の問題は実はさかのぼって、幼児教育の問題にまで波及してきている、と言っては言いすぎでしょうか。

いろいろ私の申しあげたいことは、言い落とした点もありましたけど、以上のような問題提起です。（お茶の水女子大学）

（幼稚園教育実際指導研究会講演より）

幼児の言語研究(三)

——幼稚園児の話しコトバにおける動詞の実態——

西ノ内　多恵
伊東　照子
村田　和子

◇はじめに

前号では名詞の実態について述べましたが、ここでは、話しコトバにおける動詞の実態はどうなっているのかを三歳児、四歳児、五歳児それぞれ五名ずつについて分析した結果をもとにして、その傾向や発達段階からみた特徴点などを考察してみたいと思います。

まず大きく分けると、

(1)文法的な面からみた場合の特徴点

(2)語彙的分類による傾向について

以上二つの点からみていくことにします。

表1　年齢別使用動詞総数（30分間）

5歳児		4歳児		3歳児	
153.4	I児	152.7	K児	100.0	I児
150.7	M子	74.3	K子	80.7	M子
168.6	H子	145.3	Y子	124.7	H子
297.5	H児	191.0	T児	123.6	H児
208.1	S児	166.5	I児	202.0	S児
195.7	平均	146.0	平均	126.2	平均

一、動詞の使用数

三十分間における平均使用数は、上の表にみられるような結果が得られた。年齢と共にかなり増加しているのが分かる。ここでの五歳児は、追跡研究によるため三歳児と同一人物であることをつけ加えておく。（表1）

二、使用順位の高い動詞

表2　動詞の使用順位

順位	5歳児	4歳児	3歳児
1	行く(205)	やる(184)	する(68)
2	する(203)	する(158)	言う(57)
3	作る(112)	なる(126)	やる(53)
4	いる(100)	いる(115)	ある(30)
5	やる (74)	ある(102)	なる(25)
6	言う (65)	作る (91)	行く(23)
7	来る (52)	できる(90)	来る(21)
8	なる (31)	行く (80)	寝る(20)
9	取る (29)	言う (79)	作る(19)
10	急ぐ (27)	貸す (76)	見る(18)

注：（　）内は使用数をあらわす。
3歳児のみは資料の関係で録音1回分のみの数字である。

表をみると、対象の存在を表わす「ある」「いる」対象の変化を表わす「なる」、主体の動作を表わす「やる」「する」「行く」「作る」などが共通して多く使用されている。

国立国語研究所の語彙調査によると、昭和二十八年〜二十九年の一年間の総合雑誌の延べ語数九百万語のうち、上位順にみると①する、②いる、③いう、④こと、⑤なる、であり、昭和三十一年の一年間の雑誌九十種の延べ語数一億六千万語のうち上位順にみると、①する②いる③いう④一⑤こと、となっており、動詞の順位を総合すると①する②いる③いう④なる⑤ある⑥来る⑦みる⑧思う⑨行く、である。これらはおとなを対象にした書きコトバではあるが、表2と比較してみると非常に共通していることがわかる。

三、動詞の活用別使用数

三、四、五歳児に共通して、圧倒的に五段活用が多く、次いで下一段活用、上一段活用の順となっており、カ変が最も少ないのも共通している。

表3　活用別による使用数

	五段	下一	上一	サ変	カ変
3歳児	75.9	21.9	13.9	10.1	4.4
4歳児	91.0	21.7	18.8	10.8	3.6
5歳児	117.1	33.1	13.5	13.2	6.0
合計	284.0	76.7	46.2	34.1	14.0

（注：3回平均）

四段活用は、動詞の中でも古いかたちの動詞であると言われており、これが多いということは、おとなの言語生活において五段活用が多いことを示しているのであろうか。

四、動詞の活用形においては何活用形が多いか

次の表4は三十分間の平均使用数を出したものである。これによると共通して連用形が最も多く使用されている。連用形の音便及び接続助詞につながるものがその多数を占めており、接続助詞を使って、短文であった言語表現から、長い文章形式をとっての

言語表現をしようとするのがわかる。

命令形、仮定形が少ない、連体形が五歳児に少ないのは言語の発達とどうかかわっているのか興味がある。

表4　動詞の活用形別使用数

	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
3歳児	17.8	72.4	16.0	16.3	2.2	2.1
4歳児	16.4	63.5	20.7	18.5	3.0	1.9
5歳児	20.4	100.7	26.0	12.5	2.7	6.5
合計	54.6	236.6	62.7	47.3	7.9	10.5

五、複合動詞について

普通の動詞に比べてかなりおくれて発達するといわれており、ここでも年齢と共に複雑な語が使われているのがわかる。五名の被験児が使用していたものをあげると、

(1)三歳児では、「歌い出す」「振りかえる」「着替える」「出っ張る」「思いつく」「出かける」「ぶっとばす」「飛び込む」「持ち上げる」「作り上げる」「探し出す」「積み込む」「取り替える」「逃げ出す」「出しやがる」「作りやがる」など、

(2)四歳児では、

「取り替える」「追いかける」「組み立てる」「でき上がる」「踏みつぶす」「押し出す」「落っこちる」「引っ張る」「やり直す」「やり上げる」など、

(3)五歳児では、

「はね返す」「ぶちこわす」「差し込む」「追いつく」「飛び込む」「取り替える」「追いかける」「吹き込む」「切り離す」「切り替える」「踏みつぶす」「ふっとばす」「でき上がる」「飛びかかる」「行き過ぎる」「飛びかえる」「おし込む」

などで、いずれも男児に多く使用されているのが特徴的である。

六、動詞の分類

子どもたちが使っている動詞の内容や傾向を考察するため、便宜的に動詞の分類項目を設定してみた。これは名詞の分類の際に参考としたAllen Walpoleの分類項目及び教科研国語部会発行による「語彙教育」の動詞の項を参考とし、併わせて、専修大学・中田武司先生並びに国立国語研究所・大久保愛先生の助言をいただきながら、自分たち三名で作成したものである。

まず、動詞を動作性をあらわすものと、状態性をあらわすものとに二大別した。動作性をあらわす動詞をさらに次の五項目に分類し、次のように概念規定した。

Ⅰ　動作性をあらわす動詞

①人間関係、その動詞に対人関係及び社会性の要素が含まれているもの。

②認識・思考、その動詞に知的な活動の要素が含まれているもの。

③行為・活動、その動詞に主体の行為・行動をあらわす要素が含まれているもの。

④生理・感覚、その動詞に人間としての生理的欲求及び感覚・感情性の要素が含まれているもの。

⑤自然現象、その動詞に天候や自然界の事象をあらわす要素が含まれているもの。

Ⅱ　状態性をあらわす動詞、主体の行動ではなく、客体化できる状態性を含むもの。

表5　3歳児の動詞分類表

注○内は使用数をあらわす

I児	動作性	人間関係	あげる⑤　もらう①　くれる① 教える②　遊ぶ①
		認識・思考	言う⑪　思う①　要る① わかる⑧　話す①
		行為・活動	する　⑰　歌う　②　取る　① やる　⑭　走る　②　探す　① 行く　⑪　並ぶ　②　やめる　① 持つ　⑥　転がす②　つく　① はやす④　来る　②　住まう　① 集める④　転ぶ　①　のける　① 出る　④　作る　①　倒れる　① 入れる④　飛ばす①　つかまらす　① 挙げる④　どく　① 置く　③　乗せる① 出す　③　掘る　①
		生理・感覚	食べる②　あがる①　くたびれる① 寝る　②
		自然現象	飛ぶ　③　沈む①
	状態性		なる　⑤　違う　②　いる　① できる⑤　逃げる①　入る　① ある　②　こぼれる①　走れる①
M子	動作性	人間関係	待つ　④　買う①　もらう① あげる③
		認識・思考	言う⑥　書く　⑤　知る① 見る⑥　わかる③
		行為・活動	来る⑦　持つ　③　帰る　① する⑦　入れる②　敷く　① やる⑦　煮る　②　通す　① 切る⑥　脱ぐ　②　弾く　① 作る⑤　取る　②　やめる　① 塗る③　使う　②　そろえる①
		生理・感覚	びっくりする②
		自然現象	暮れる③　鳴る①
	状態性		なる　④　さがる① いる　③　ある　① できる③　違う　①

表6　4歳児の動詞分類表

K児	動作性	人間関係	遊ぶ③　手伝う①　くれる①
		認識・思考	書く　⑦　知る　④　読む　① わかる⑥　考える③　覚える　① 見る　⑥　言う　②　見つける①
		行為・活動	やる㉒　つける　②　変える① 作る⑬　馳ける　①　合わせる① 来る④　つなげる①　行く　① する④　つなぐ　①　はずす① 入る②　置く　①　入れる① 持つ②　飛ぶ　①　こわす① 使う②　おさえる①　重ねる①
		生理・感覚	寝る⑤　びっくりする①
		自然現象	
	状態性		なる　⑱　倒れる　⑤　ぶつかる① ある　⑭　聞こえる　②　こわれる① いる　⑧　落っこちる①　重なる　① ちがう⑦　落ちる　①　余る　① できる⑦　飛べる　①　足りる　①
K子	動作性	人間関係	遊ぶ③
		認識・思考	考える①
		行為・活動	やる⑫　置く　① 作る⑫　やめる① する⑦　抜かす① 行く③ 渡る② 飛ぶ①
		生理・感覚	寝る①　飽きる①
		自然現象	
	状態性		ちがう⑤　できる　②　なる① 余る　②　倒れる　① いる　②　はいれる①

使　用　数

5　歳　児					
I 児	M 子	H 子	H 児	S 児	合 計
10.0	14.7	10.3	19.3	24.0	78.3
17.0	19.7	18.0	6.0	4.7	65.4
86.0	108.0	173.0	97.0	97.3	561.3
4.7	0.7	0.6	3.7	7.3	17.0
0	0.7	1.3	0.7	0.7	3.4
35.7	64.3	94.3	24.7	35.3	254.3

表7　5歳児の動詞分類表

I 児	動作性	人間関係	あげる⑤　くれる③　借りる① もらう④　待つ　②
		認識・思考	みつける⑥　知る②　数える①　教える① 言う　⑤　見る②　わかる①　①
		行為・活動	する　⑰　帰る　②　追いつく　① 作る　⑧　わける②　戻る　① 行く　⑦　並べる②　集める　① やる　⑦　立つ　②　つなぐ　① 取る　⑥　ふく　①　見せる　① つける⑤　出す　①　逃げる　① 来る　④　勝つ　①　ぶっつける① 入れる④　向く　①　動く　① 頑張る④　いたす①　しまう　① 持つ　③　かまう①　しまわる① こわす③　負ける①　さし込む　① 切る　②　とらす①　はさむ　① とぶ　②　決める①　置く　① 揃える②　せめる①
		生理・感覚	食べる①
		自然現象	
	状態性		なる　⑬　できる　①　なおる　① いる　⑧　見える　①　はずれる① 別かれる⑦　くっつく①　出る　① ある　⑤　ひかれる①　足りる　① 開く　②　つながる①　こわれる① ちがう　②　とれる　①　つづく　①
M 子	動作性	人間関係	遊ぶ⑤　あげる②　待つ① 貸す③　もらう②
		認識・思考	言う⑥　わかる①　見る①
		行為・活動	作る㉖　かぶせる④　ける　① する㉔　閉める　④　まわる　① やる⑫　持つ　③　抜く　① 取る⑧　片づける③　あける　① 出す⑧　入る　②　吹きこむ① 使う⑦　煮る　②　切る　① 置く⑤　はさむ　①　乗る　① 行く④　ふく　①　着る　① 来る④　帰る　①　すぎる　①
		生理・感覚	寝る①
		自然現象	鳴く①
	状態性		いる　⑬　ある　②　すぎる　① できる⑥　ちがう　②　くっつく① これる④　作れる　①　まちがう① なる　④　こげる　① たりる④　こわれる①

これらの分類項目に当てはめて年齢別に作表してみた。紙面の都合もあり各年齢二名ずつとし、録音一回分(三十分)に使用した語彙のみを表にした。

表8は項目別による使用数の一覧表である。これらの表からみて、特徴的なことを挙げると、

①人間関係をあらわす動詞は、名詞の場合のそれに比べ少ないのが目立つ。これは人間関係の広がりの停滞を意味するものではなく、動詞総数とこの項目に該当する語彙の比率との関係によるものであろう。

②認識・思考の項をみると四・五歳児よりもむしろ三歳児において量的に増加しているのは何を意味しているのであろうか。さ

表8　項　目　別　動　詞

	分類項目	3歳児						4歳児					
		I児	M子	H子	H児	S児	合計	K子	K児	Y子	T児	I児	合計
動作・作用をあらわすもの	人間関係	10.0	9.0	5.0	4.0	11.0	39.0	4.7	5.7	11.7	33.5	25.0	80.6
	認識・思考	22.0	21.0	7.0	8.0	44.0	102.0	5.3	22.7	11.7	13.5	13.0	66.2
	行為・活動	98.0	54.0	65.0	52.0	92.0	361.0	43.0	63.0	77.0	85.0	61.5	329.5
	生理・感覚	6.0	2.0	35.0	3.0	0	46.0	2.0	5.3	5.7	2.5	3.0	18.5
	自然現象	4.0	4.0	6.0	2.0	9.0	25.0	1.0	0.7	0.3	0	0	2.0
状態をあらわすもの		19.0	14.0	17.0	32.0	34.0	116.0	18.0	55.3	38.7	57.0	64.0	233.0

（注：4.5歳児は3回平均数であるが，3歳児は資料の関係から1回の数字である）

まざまな事物に興味をもち始め知ろうとしているためとも考えられる。

③行為・活動は、分類上最も多い項目であることは共通しているが、五歳児において飛躍的な増加を示しているのは、言語発達の過程を示唆しているように思われる。

④生理・感覚に属するものが非常に少ないのは、形容詞・形容動詞の中に多く含まれているためもあるだろう。

⑤次に「状態性」の項目に分類できる動詞は、動作性の中の「行為・活動」に属する動詞群に次いで多い。動作性と状態性の割合を三歳児でみると五七三／一一六で約五対一になっているが四歳児でのそれは約二対一と急激に、状態性に属する語彙が増している。五歳児においても同じ傾向を示している。

三歳児段階では「なる」「できる」「ある」「いる」「違う」など、せまい範囲の客体化にとどまっているが、四、五歳児になると、かなり生活経験も拡大してくるので、さまざまな日常における状態を認識できるようになり、従って、言語においても急激な広がりとなってあらわれるのであろうと思われる。

一回目録音分析から四、五歳児の状態性初出語を拾ってみると、

◇四歳児では、

「余る」「出る」「取れる」「はいれる」「動く」「飛べる」「落ちる」「ぶつかる」「重なる」「つなげる」「聞こえる」「終る」「光る」「曲がる」「はずれる」「乗れる」「まわる」「使える」「切れる」「狂う」「やりあげる」「困る」「過ぎる」「溶ける」「ひっくり返る」「経つ」「当たる」「でき上がる」

などが三歳児には見られなかった動詞として使われている。

◇五歳児では、

「別れる」「開く」「続く」「なおる」「つながる」「ひかれる」「変わる」「だまる」「崩れる」「消える」「忘れる」「作れる」「上がる」「なおせる」「こげる」「これる」「くっつく」「間違う」「ふめる」「かかる」「焼ける」

などである。

次に、各自について一回分のみの資料に基づいて動作性による初出語を拾って表にしてみる（表9）。一回分のみの比較なので、厳密に四歳児、五歳児の初出語とは言えないが、動詞の使用の範囲の広まりを見る一つの手がかりとなり得ると思う。

以上、ごく大ざっぱに三歳児、四歳児、五歳児の各五名ずつの資料に基づいた動詞の実態について考察して来たが、分析、追求が浅くて不十分な考察しかできなかったように思う。予想以上に大変な時間のかかる作業なので、被験児の数も限定されてしまうが、得られた結果が一般化できるように、対象児の数を増加して目下その整理に取りかかっているところである。

さらに今後の課題として、使用語の数だけでなく、内容面でのもっと深い考察が要求されることと、この研究が実践の場に役立つようなものにしていきたいと思っている。

（白梅学園附属幼稚園・伊東照子記）

表9　初出語一覧表（録音1回分のみ）

	分類項目	4　歳　児	5　歳　児
動作性	人間関係	配る　借りる　射つ 与える　渡す	助ける　だます 返す
	認識・思考	試す　覚える　考える 読む　決める	数える　見つかる 教える
	行為・活動	渡る　抜く　放る 合わせる　乗る　吊る つなぐ　頑張る　ねらう おさえる　すべる ぶつかる　曲げる 拾う 抜かす　積む はずす　片づける つなげる　焼く 重ねる　つかまる	決める　消える　突く せめる　かぶる　のぞく かまう　くずれる　なくす 勝つ　はさむ　はたらく 負ける　坐る　折る 守る　閉める　とらす しまう　生きる　なおせる 逃げる　拡げる　呼ぶ 貯める　黙る 割る　拭く
	生理・感覚	飽きる	かわく，疲れる
	自然現象	降る	鳴く

フレーベルの遺跡を訪ねて

内山憲尚

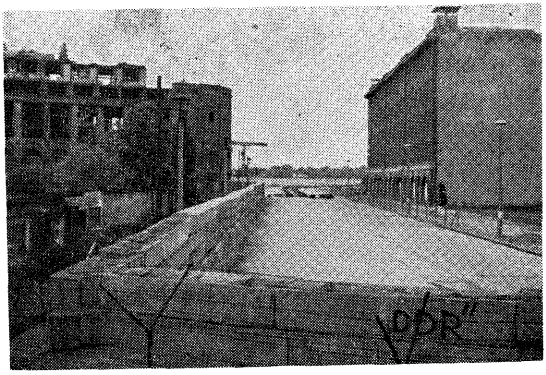
一、チューリンゲン地方

一七八二年四月二十一日フレーベルが生まれたオーベルワイスバッハ、はじめて幼稚園を開いたバッド・ブランケンブルグ、彼が教育のために活躍をした行動圏はチューリンゲンを中心としている。

チューリンゲン地方は戦前はドイツの中心部で、ドイツの緑の森の心臓と言われたところであるが、第二次世界大戦でドイツが東西に二分せられ、チューリンゲンは東ドイツ（ドイツ民主主義共和国）方に入れられたので入国手続が面倒なのと、フレーベルの遺跡の所在地がかなり辺鄙なところで、交通の便がよくないなどの理由で、従来幼児教育研究者でも、わざわざ訪ねる人が少なかったらしい。

われわれの今回の欧州ソ連幼児教育研修視察団のスケジュールには、最初からフレーベルの遺跡を訪ねることを主目的として予定をたてた。

西ベルリンと東ベルリンの境界線は、東側と西側とに五十メートル位へだてて空地があ



東独・西独国境

り、四、五十センチの壁が両方に造られている。ベルリンが中央から西と東に分けられて検問所は両方に、ソ連側と連合国側に在って、自由に往き来ができない。

われわれ旅行者もパスポートを示さなければならない。ことに西から東ドイツへ入るのは非常にやかましく、西ドイツのバスから全部が下りて、東ドイツのバスに乗り替えだ。西ドイツの運転手もバスガイドも全部下ろされて、東ドイツ側へは下りられず、そのまま西ドイツへ帰らされて、代って東ドイツの運転手がのって来た。われわれはその車の下で約一時間ほど待たされ、各自の持ち金を書き出させられた。パスポートは一括提出、あらかじめ送ってあったリストと引き合わせである。なるほどドイツ民主主義共和国はうるさい国だと思った。

われわれのソ連、ドイツ民主主義共和国への交渉は万事毎日新聞サービスの海外課へ一任したから直接交渉をしてくれたが、参観先やホテルなども現地へ行って見なければハッキリしたことがわからないので不便でこまると言っていた。

東側の検問所で時間をとって、ベルリンのシューネルフエルト空港を、七時二十五分に出てローカル線に乗りかえて、終点エルフルト市の空港に着いたら陽がトップリと暮れていた。東ドイツ南部の町エルフルト市は人口二十万のチョッとした町だ。その夜はこの町のツーリストホテルへ泊るのだが、田舎町で四十名の客の食事は用意ができかねると、町の中央にあるインターナショナル・レストランで夕飯をとることになった。いよいよ明日はフレーベルの遺跡を訪ねると思うとうれしくて心がおどる。

二、バッド・ブランケンブルグ

「明日は強行軍だから」と早寝をする。五時起床。天気はよくない、小雨が降っている。六時半朝食、七時十分ツーリストホテル出発だ。本日フレーベルの遺跡を案内してくれるガイドさんが来た。四十歳前後のでっぷり肥えたミセス・グラナーレルさん—聞いて見るとフレーベルの遺跡の案内ははじめてだそうで、大きなチューリンゲン地方の地図を前に置いて運転手君といちいち相談だ。

エルフルト市の地方庁へガイドさんとこちらの世話係とが、リストを持って届けに寄り、いよいよバッド・ブランケンブルグへ向かう。道は舗装はしてないが、幅の広い坦々たる道だ。なだらかな丘陵がつづいてところどころに大きな森がある——チューリンゲン特有の森だ。ライ麦の畑は青々と畳を敷きつめたように広がり、菜の花の黄が色模様を織りなしている。白と黒のまだら牛がのんびりと草をたべているのも静かな風景である。

ブナの並木道を走ること三時間あまり。目的地のバッド・ブランケンブルグの町に着いた。ここはフレーベルが一八三七年に作業教育所（一八四〇年幼稚園と改称）を開いたところである。人口一万ほどの小さな町であるが、フレーベルの幼稚園やフレーベル博物館は地図にもないし標識もないので、どこだかわからない。バスを町の中央に停めてガイドさんが町の人たちにたずねながら歩く、二百メートル位歩いてやっとフレーベル博物館をさがし当てた――その時のよろこびは全くたとえようがない位であった。

博物館は木造三階建で、二階、三階が博物館、一階がフレーベル第二幼稚園になっている。

あまりのうれしさにいきなり二階にかけのぼった。

二階左側が文献や写真の展示室で、作業教育所として発足当時の幼稚園の写真、恩物工場の古画、一八二六年に上梓された「人の教育」の原稿、一八四四年に出版した「母の子守歌」の原稿と、彼の友人ウンゲン画伯の書いたと言われているさし絵の原画、恩物作製の原図、フレーベル自筆の楽譜、彼の友人や夫人、後援者の写真など、三階には彼が生前に使用していた身のまわり品家具什器、フレーベルの書簡などが陳列してあった。

フレーベル博物館前

館長エラー・ウィッケナー女史が親しく親切に案内してくださった。二階の右側の部屋の館長室に案内されて、しばらく話した。三年前に広島大学の荘司雅子教授が、フレーベル学会の時に来られて、著書などいただいたと「フレーベルの研究」を示された。日本へ帰ったら荘司先生に渡してくれと手紙をことづかった。「こんなにたくさんわざわざ日本から来てくださってありがとう、日本は古くからフレーベル先生に理解があり、おたずねくださったことを心からよろこんでおります」とうれしそうに話された。

三、フレーベル幼稚園

フレーベルが、最初に開いた一八三七年の幼稚園は、その後建て替えられ、それがさらにフレーベル博物館の新築とともに、三階建の二、三階が博物館となり、一階が幼稚園となって現在のところに建てられた。

二度目に建てられた幼稚園の建物はそのままあるが、今では普通の人の住居となっている三階建木造で、二階の壁には、フレー

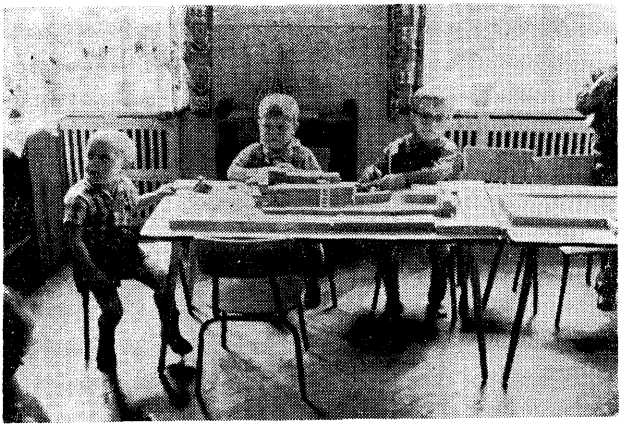
元の幼稚園　標札「一八四〇年ここに幼稚園を始む」

ベルの幼稚園と書かれており、下の壁の標札には「一八四〇年フレーベルが、はじめて幼稚園を開いたところ」と書かれている。

現在の幼稚園は十二坪ばかりの保育室が四つ。一クラス十六名平均で四人の先生が静かに保育をしている。幼稚園についての印刷物もなく、カリキュラムらしいものもない。部屋の中にはフレーベルの恩物やおもちゃの類が置いてあって、子どもたちは自由にとり出して遊んでいる。わが国のように一クラス四十名からいて一斉に製作をしたり、歌を歌ったりするようなことはしない。

ピアノが一台、遊戯室は別にない。屋外運動場も幼稚園の周囲に垣根もなんにもない庭で、わくのぼりのような遊具と鉄棒のような遊具と砂場の小さいのがあるだけである。

あるクラスは十一名で、フレーベルの第六恩物を机の上へならべてみんなで遊んでいた。この組は年少組である。一クラスは製作をやっていた。



積木で遊ぶ園児

先生は個人教授のような形でだまって坐っていた。部屋は明るく、子どもが少ないので、部屋や机は十分に使用でき、大きく高い窓の前にはいろいろな植木鉢や、花の差した花ビンが置いてあった。わが国の幼稚園の

ことを思うと全くイメージがちがって、ほとんど家庭といった感じである。われわれが行ったことが連絡されたらしい。町長さん、教育委員会の人たちがあいさつに来られた。

十一時までに、フレーベルの生誕地オーベルワイスバッハに行かねばならないので、ウィッケナー館長と別れて、博物館を出たら、表にフレーベル小学校の五、六年生が三十名ばかり先生に引率されて来て待っていてくれた。町の人といっしょになって歓迎会だ。われわれをとり巻いて歓迎の歌の合唱だ。われわれも「お返しに何か歌おう」「さくらさくら」がよかろうと四十名がドラ声を張り上げて歌った。歌が終わると、町から団へと町の写真帳、フレーベルの記念バッジと、小さな三角旗をおくられた。

子どもたちは手紙を各人一人一人に手渡した。画用紙のような厚紙にそれぞれ花の絵が書いてあり、子どもの字で

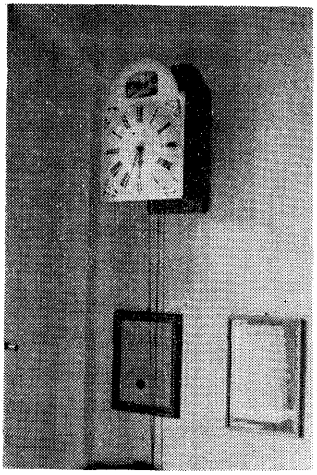
「DDRの子どもより　日本の子どもへごあいさつ　DDRの子どもたちは、きれいないくつかの花をもって　日本の全子どもたちに、心からのごあいさつを申し上げます。世界のすべての子どもたちのために平和をのぞんでいます」

と書いてあった。「さよなら、さよなら」手をふって見送ってくれた。教育委員会の人たちと六年生の大きい子ども四、五人はバスのところまで見送って、いつまでもなごりおしそうにしていた。全く純情、素朴で、その印象は永久に忘れることができない。

四、オーベルワイスバッハ

バスに乗って、約五十分、緑の並木道を南へ進んでお昼前にフレーベルの生地オーベルワイスバッハへ着いた。町はブランケンブルグより小さかった。出生の家はすぐわかった。記念館になっている。二階建の家だ。二階の部屋が生まれたところで階段をあがるとすぐの部屋で、寝台があり寝室が保存されている。柱には古風な時計があり、ベッドの枕元には棚があって、フレーベルの像が置いてある。フレーベル記念館といっている。別に部屋には写真や、恩物などがならべてあったが、博物館のものより数も少なく、貴重さにおいてもいくらかおとっているように思われた。

この生誕の家でも階下が幼稚園になっていて、一クラス十五、六名で三クラスあった。保育室は博物館のものより小さかった。幼稚園の後



記念室の時計

の方が庭園になっていて傾斜した丘になっている。フレーベルの自伝に出てくる畑のあったところらしい。

フレーベル生誕の家は表の大通りに面していて、ちょうど家の前の大通りに面したところに白い坐像が置いてある。フレーベルの母親が子どものフレーベルを抱いているところだそうな。近ごろ作られたものらしい。面に「フリドリッヒ・フレーベル、一七八二年―四―二一　ここに生まれ　一八五二―六―二一　ジュヴアイナに死す」と書かれてあった。

ここでも町長さんのフリッツ・シアワーベ氏が花束を持って歓迎に来られ、いっしょに写真に納まってくださった。

十二時になったので町のレストランへ入った。粗末なレストランだが清潔で感じがいい。食事を始めようとするところへ、町の教育長があわてて入って来られて、ていねいなあいさつをされた。

生誕の家前の母子像

「こんなにたくさんの方が、フレーベル先生の生まれられた当地をお訪ねくださってありがとうございます。私たちＤＤＲも平和教育のためにフレーベル先生の教えを守って保育を続けております。日本では古くからフレーベルの方式による幼児教育がなされていることを聞いております。共産の国と資本主義の国とのちがいはありますが、子どもを平和に育てることにちがいはありません。どうぞ今後ともよろしくお願いいたします」

中央が町長さん

こちらからもお礼のことばを述べて、なごやかな交歓会が開かれた。肥えた教育長さんは食事の終わるまで待っていてくださって、われわれがバスに乗るのをいつまでもいつまでも見送ってくださっ

た。バスはフレーベルの生誕の地オーベルワイスバッハを離れてエルフルト市へ、約四時間の道をいそいだ。

たそがれてゆくチューリンゲンの森の中をぬけて——

五、フレーベルの遺跡訪問者

日本人でフレーベルの遺跡を訪問された方は、われわれ以前に相当にあったであろうが、その紀行や報告を発表された方を手許にある書物の中から拾い上げて見る。

大正十四年五月、奈良女子高等師範学校の小川正行教授が訪問されている（「フレーベルの生涯及思想」）P365）。汽車で行くときハルツのブランケンブルヒ行きに間違って乗って失敗し、やっとチューリンゲンのブランケンブルグ村へたどり着いた苦心談がのっている。二日目にやっと「フレーベルハウス」を訪ね当てているが、これはどうも現在のフレーベル博物館の前身の建物らしい。昭和四年五月広島大学の長田新教授が単身で訪ねておられる（「フレーベル自伝」）P273）。五月十九日にブランケンブルグ町を、二十六日に生誕地のオーベルワイスバッハを訪ね、二十三日フレーベル博物館を訪ねておられる（昭和十二年発行）。昭和十年十一月、前フレーベル館高市慶雄社長が第六回世界教育会議に出席しての帰りに遺跡を訪ねている（実地踏査に基づくフレーベル全伝」P41）。この本の序文にお茶の水女子大学の倉橋惣三教授が「殊に自分のフレーベル遺跡巡礼記を書きまとめることを怠っている私としては、この書の成ったことによって、なんとなく、荷を一つ人に頒けたような気安さをも味っているのである」と言っていられるから、昭和当初にフレーベルの遺跡を訪ねられたようである。

ウィッケナー館長

現在のフレーベル館の菅野健介社長も先年現地を親しく訪問されたそうであるが、まだ直接にいろいろ話をする機会を得ない。

フレーベル博物館長エラー・ウィッケナー女史の話では広島大学の荘司雅子教授が三年前に訪問されたとのことである。

ウィッケナー館長は日本からの訪問——しかも四十名の幼児教育者が大挙して訪問したことに対し、非常によろこびを持たれたようである。さっそく多大の感謝と今後の交宜を乞うというていちょうな書面をいただいて恐縮している次第である。

（鶴見女子大学）

幼児の砂遊びを見ていたら、砂の山をもり上げて、その上にしゃべるを二つ合わせて立てて、倒れないように砂でかためている。砂を手のひらでたたいたり、握ったり、みぞをつくったりしている。何かなと思ってみていると、そのしゃべるを両手で持って、空中にさし上げ、ドッキングしますといって走らせる。それは月へいく宇宙船の基地であった。宇宙時代は幼児の砂場にも反映している。ところがしばらくするうちに、しゃべるは起重機になって砂を運ぶ機械になった。宇宙船も起重機も同じしゃべるである。この同じしゃべるが、むかしは大砲に使われたこともあろうし、もっと他のことにも使われたであろう。

しかし、砂をかためたり、たたいたり、溝を掘ったり、水を流したりということは、いまもむかしも変わりなくやられていたことであり、それこそが砂あそびの本質である。宇宙船になったり大砲になったりするのは、手でたたいたり掘ったりかためたりするためのいわば材料になっているにすぎない。

幼児の遊びを見るにつけても、幼児は何でもを自分の遊びの中にとりいれていく力におどろく。時代の話題をちゃんととりいれながら、幼児の発達が必要としている砂いじりに余念がない。おそらく、こうしてずっと昔から子どもはどろをこね、砂をいじりながら、人間として必要な能力（そこには運動能力もあるし、知的能力もあるし触覚という原始的な感覚器官を通して感情の教育もふくまれている）を作り上げてきたのであろう。

それにしても、近ごろの幼児は、幼稚園で砂いじりをやらなければ、家の近くでは泥や砂をこねることもできないことが多くなってしまった。道路はコンクリートと自動車、家の中には家畜もいないし、周囲には木の緑もない。一本の自動車道路が富士山の自然を破壊してしまうように、文明は幼児らしい生活を奪い、人間をだめにしてしまうことはないだろうか。幼稚園は、幼児のあそびの生活を確保することによほどいっしょうけんめいにならなければたいへんな時代なのだ。

幼児の教育　第六十九巻　第二号

二月号　©　定価八〇円

昭和四十五年一月二十五日　印刷
昭和四十五年二月　一　日　発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者　津　守　真

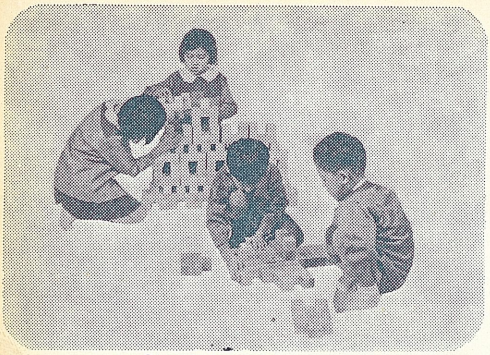
112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

101 東京都板橋区志村一ノ一一
印刷所　凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座　東京　一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

新しい遊具です!!



ニュータイプの積木です

クロスブロック（大）

積木の重ねる、組み木のはめ込むという構成が同時にできる新製品です。バランスを考えれば斜めの方向への伸展も可能で、そこに生まれる造形のおもしろさは、いままでの積木では得られぬものです。じつにさまざまの組み合わせ、造形ができ、子どもたちの遊びはいきいきと、限りなく発展していくでしょう。木製。32個1組。

（原案・通産省製品科学研究所デザイン分析研究室）

空間を大きく生かす

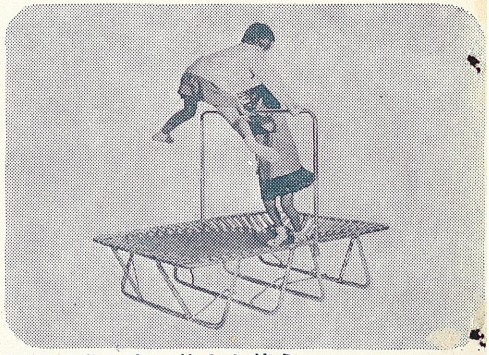
キンダー枠積木（大）

これまでの枠積木を大型にした当社独自の新製品です。大型ですから、いままでの枠積木ではなし得なかった大きな空間を生かしての遊びと、全身運動ができるようになりました。くぐることも、乗って遊ぶことも、できます。積み上げや、ごっこ遊び、トンネルくぐりなど、全身を使っての遊びは、体育面の効果にも大きく役だちます。中型箱積木と同寸法ですから、併用して遊ぶと一層おもしろいでしょう

ごっこ遊びを楽しくする

キンダーストアー

美しく、しかも機能的にできていますので、大勢の友だち同士でお店ごっこを楽しむことができます。ゆったりした内部（130cm×128.5cm）には5～6人の子どもが入って遊べます。陳列棚と、とりつけ自由のバスケットは、すきな物を並べましょう。脚にはキャスターがついていますから、移動自由です。ストアーの背面は、人形芝居の舞台としてもお使いになれます。



平衡感覚を育て体力を養う

キンダートランポリン

トランポリンによるリズミカルなジャンプ遊びは、跳躍力や平衡感覚を育て、知らずしらずのうちに内臓も強化します。このキンダートランポリンは、バネも、布も、手すりも幼児むきに考えられています。折りたたみ式で、組み立てはシン棒をピンでとめるだけですから、簡単にできます。

発売・株式会社 フレーベル館

フレーベル館 45年度 新学期用品

出席カード
出席シール
出席ゴム印
園のたより
おたよりばさみ
けんこうのきろく
お誕生カード
組別名札

*

じゆうがちょう
せいさくちょう
カラーノート
カラーあそび
カラフルプレイ
きりがみあそび
きりがみお話集
かずのきりがみ
もじのきりがみ
ステレオかみざいく
おりがみあそび

こうさくカード
こうさくあそび
たのしいおしごと
きりぬきカード
ことばあそび
かずあそび
キンダーワーク
たのしいワーク
くふうあそび

*

はさみ
ボール切りはさみ
のり
おりがみ
キンダーシール
まんてんくれよん
まんてんくれよん ソフト
まんてんぱすてら
キンダーねんど
キンダーかみねんど

キンダーねんどベラ
キンダーねんど板
キンダーねんどケース
おどうぐばこ
ビニカラー
キンダーカラーペン

*

保育料袋
保育証書
修了証書
賞状用紙
証書用ビニール筒
幼児健康診断票
幼児指導の記録
幼児指導要録
幼児指導要録抄本
幼児指導要録補助簿
出席簿
園日誌
保育日誌

修了台帳
家庭状況調査表
児童票
綴込表紙
安全色帽子
園児用上履
園児用下履

*

キンダークッション
キンダーバッグ
つうえんバッグ
ぴんくま給食カップ
ぴんくま給食プレー
ぴんくま給食
　ランチプレート
キンダーチェアー
キンダーデスク
ハンドカスタ
ナック園児服
ナックあそび着

●もよりの代理店・支社・支店・出張所にご用命ください。

発売・株式会社 フレーベル館